

41453

教科書文庫

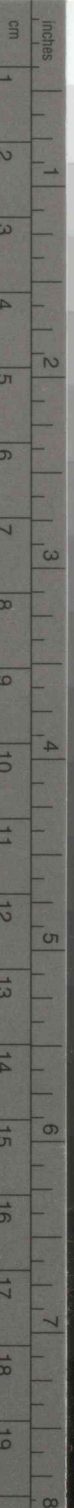
4
810
41-1941
200030
1698

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759
T.10
資料室

新制國語讀本

新教授要目準據

卷四



日九十月一十年六十和昭
濟定檢省部文
用科文漢語國校學中

教科書文庫
4
810
41-1941
2000301698

資 料 室

375.9
T010

學習院教授 東條操編

新制國語讀本 卷四

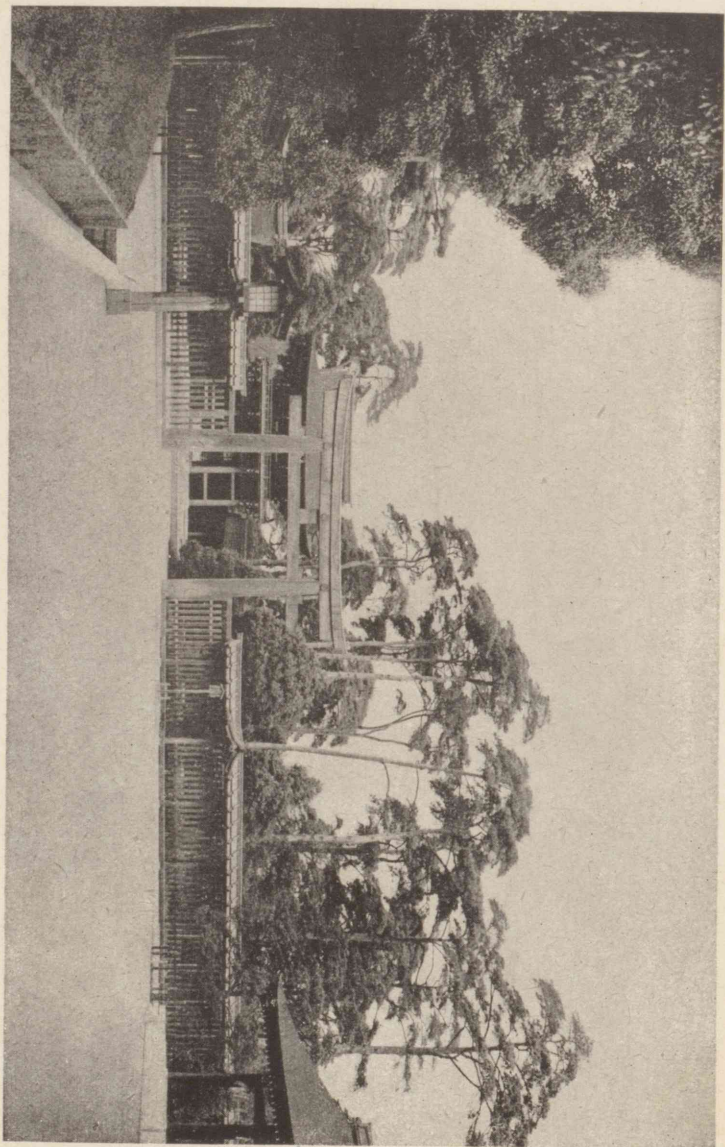
新教授要目準據

東京 三省堂
大阪

広島大学図書

2000301698





(照 参 課 一 第)

殿 拜 宮 神 治 明

廣 島 大 學 書 庫

廣 島 大 學 教 育 部 印 31669 圖 書

東 洋 文 庫 東 洋 文 庫

大 學 三 書 堂

卷四 目次

一	明治天皇の御製	一
二	日本精神	一〇
三	阿蘇のけむり	二二
四	笑話	二七
一	星取り	二七
二	湯漬	二七
三	朱槍	二八
四	敷珠	二九
五	留守	三〇
	北原白秋	一
	西條八十	一〇
	夏目漱石	二二
	安樂庵策傳	二七

目次

五 面白い文章と尊い文章

六 名人園平

七 趣味

八 俳句の解釋

九 春夏秋冬

一〇 誠の説

一一 武蔵野

一二 箱根路

一三 祭祀の禮

一四 清淨の國

五十嵐 力 三一

鈴木 鼓村 四三

幸田 露伴 五一

高濱 虛子 五六

(諸家) 六四

三浦 梅園 六五

國木田 獨步 七〇

正岡 子規 八二

松平 定信 八九

大町 桂月 九四

一五 雪

一六 スキー禮讚

一七 スポーツと人生

一八 獨立

一九 鶯が鳴く

二〇 折にふれて

二一 我が袖の記

一 熱海の冬

二三 保の春

二三 千本松原

堀口 大學 一〇〇

木原 均 一〇三

東 龍太郎 一一二

福澤 諭吉 一一九

荻原 井泉水 一二三

島崎 藤村 一三一

高山 樗牛 一三四

一三五

一三八

伊藤 左千夫 一三八

- 二三 日新の工夫
- 二四 夜 又 王
- 二五 哲人聖德皇太子

- 貝原益軒 一四六
- 岡本綺堂 一五〇
- 高島米峰 一六六

— 目次 終 —



新制國語讀本 卷四

一 明治天皇の御製

北原 白秋

北原白秋
名は隆吉。詩人。
福岡縣の人。明
治十八年生。

景仰

明治天皇は現つ神としての大自覺に立たせられた。この神ながらの道に立ち、まことに聖帝として萬民の景仰を受けさせられた。その御製を拜するにまことに王者の御風格が、大御心を通じて、蒼穹のごとく、日天のごとく、十方四海に光耀してわたらせられる。歌がらといふ點から見れば、あらゆる古今の名歌人も、大帝の御前には鞠躬如たらねばならぬ。帝王と凡下とは自らにして違

鞠躬如

ふ。これは天意であつて、いかんとも爲すすべはない。
あさみどり澄みわたりたる大空の

廣きをおのが心ともがな

萬葉調



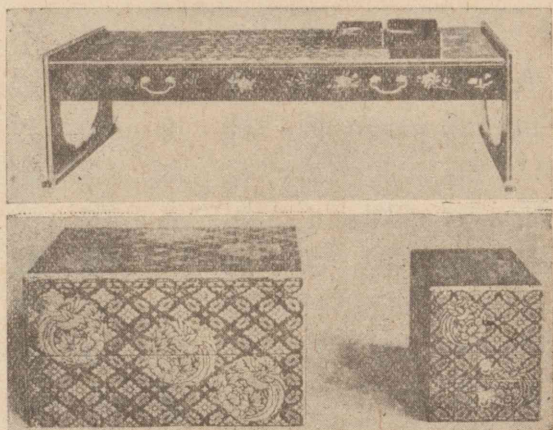
明治天皇

御製は自らな歌調で、御歌所の歌調を遙に超越しておはせられる。ある歌人が萬葉調でおはせられぬといふ點について遺憾の意を表してゐたが、萬葉調ならぬ點こそ御製の御製たるところではないか。何となれば大帝の御製は實に大帝の御風格そのものであつて、桂園調とか萬葉調とかを以て批判し

桂園調

光被
欽仰

おはせられた



明治天皇御造物

奉るべきで無い。形式以上の大稜威がそのまゝの帝王調として流露し光被してゐる。私どものひたすら欽仰し奉る所以は實に茲に存するのである。眞の王道こそ大帝がその上に立たせ給うた絶対無二の天の道である。現つ神としての御自覺そのものが、既に一の宗教でおはせられた。御製を一々拜誦するに、その殆ど總べてが皇祖皇宗を崇め、國を思ひ、民を慈み、四海の和平を希ひ、異民愛撫の御聲ならぬ

牽強附會
あらせられた

はない。これ我が國民の深く感佩し奉るべきところである。大帝は、人たるの道、子たるの道、言の葉の道を、あくまでも實に即いて御詠み遊ばされた。その中には教訓中の教訓、道歌中の道歌として、純藝術以外の見地から拜せられる御製も少くないが、純藝術と拜し奉るべき御作品も亦頗る多い。世の教育家、宗教家、道學家たちは、御製の眞純なる御風格を冒瀆し奉つて、その各自の道の爲に牽強附會してはならぬ。何となれば、大帝の御製は理趣のための理趣でなく、一に王者としてのさながらの御詠歎であらせられたからである。

人口に膾炙してある御製以外の御製によつて、大帝の

御一面をうかゞひ奉つても、私はほとく歌人としての大帝を思慕し奉るの情に堪へない。

誰人もまだそこに言及したものが無ささうに思はれる。よつて私は敢て茲にその種の御製を謹鈔して、歌壇の人々の拜誦を希はうと思ふのである。

秋風寒

宮のうちもふくかぜさむくなりけり

山べはいまや時雨ふるらむ

土筆

庭のおもの芝生がなかにつくくし

植ゑたるごとくおひいでにけり

をりにふれて

小山田のをしねかるべくなりぬらむ

庭の薄もほにいでにけり

秋月明

ともしびをかゝげぬ方に來てみれば

いよくあかし秋の夜の月

里

うつせみの代々木の里はしづかにて

都のほかのこゝちこそすれ

をりにふれて

かちときをあげてかへれる軍人

まぢかく見るがうれしかりけり

童

をさな子につませまほしと思ふかな

堇花さく庭をめぐりて

子

思ふ事おもふがまゝに言ひいづる

をさな心やまことなるらむ

田家雨

軒あさきしづがふせやは降る雨も
たゝみのうへにうちしぶくらむ

見花

高殿の窓てふまどをあけさせて
よもの櫻のさかりをぞみる

思無邪
「詩三百、一言以蔽之、曰思無邪」
良寛
俗名は山本榮
藤・越後國(新
潟縣)出雲崎の
歌僧。天保二年
(一八一)歿、年七
十五。

何等の滞りもあらせられぬ。その思無邪は天の思無邪である。良寛の歌はいゝと云ふ。併し、良寛以上に大帝の御製は眞率で無心であらせられる。良寛は天成の

蕩々乎として天の如し
「子曰、大哉堯之爲君也、巍巍乎、唯天爲大、唯堯則之。」
蕩乎、民無能名焉。
(論語)

童心者であつたであらう。併し、かの思無邪の境涯は禪家としての修道と忍苦とから更に深められて、始めて幼子の心に還つたものに違ひない。大帝は自らそのまゝであらせられる。禪家の悟入やそれに付き纏ふいやみが些もあらせられぬ。この純眞無垢こそは天意である。良寛の歌を渴仰する歌壇に、かくの如き大帝の御製のある事を恭禮しまつらないのは不思議である。所謂大古にして大新、蕩々乎として天の如しとは、まことに聖帝明治天皇の大御心であらせられるものを。

(季節の窓)

二 日本精神

西條八十

西條八十
詩人。早稻田大
學教授。東京市
の人。明治二十
五年生。

萬朶の櫻花

アジヤの東聖土あり、
天地の正氣あつまりて、
積むや芙蓉の峯の雪、
咲くや萬朶の櫻花。
萬古にわたる皇統は、
空に燦たる天の河、
仰げば深き感恩に、
一億の民たゞ涙。

あゝこの國の雪純く、

曾て異寇に汚されず、

あゝこの國の花赤く、

常に正義の熱に咲く、

君臣の義と父子の愛、

花づなのごとまじはりて、

仁慈と忠と孝悌と、

琴の如くに弾きあそぶ。

今西歐に日は暮れて、

光を呼ばふ聲すなり、

世界は明けんほのぐくと、

神の國なる東より。

(國民詩集)

花づな

三 阿蘇のけむり

夏目漱石

夏目漱石
名は金之助。英
文學者。小説家。
東京市の人。大
正五年歿。年五
十。

「あの音は壯烈だな。」

「足の下が、もう揺れて居る様だ。——おい一寸地面へ耳をつけて聽いて見給へ。」

「どんなだい。」

「非常な音だ。確に足の下が唸つてゐる。」

「その割に煙が來ないな。」

「風の所爲だ。北風だから、右へ吹きつけるんだ。」

「樹が多いから、方角が分らない。もう少し登つたら見當がつくだらう。」

所爲

しばらくは雜木林の間に行く。道幅は三尺に足らぬ。いくら仲が善くても、並んで歩く譯には行かぬ。圭さんは大きな足を悠々と振つて先へ行く。碌さんは小さな體軀をすぼめて小股に後から尾いて行く。尾いて行きながら、圭さんの足跡の大きいのに感心して居る。感心しながら歩いて行くと、段々後れて仕舞ふ。

路は左右に曲折して爪先上りだから、三十分と立たぬうちに、圭さんの影を見失つた。樹と樹との間をすかして見ても、何も見えぬ。山をおりる人は一人もない。上るものにも全く出會はない。只所々に馬の足跡がある。たまに草鞋の切れが茨にかゝつてゐる。その外に、人の

阿蘇の社
官幣大社。熊本
縣阿蘇郡宮地町
に在る。

氣色は更に無い。餛飩腹の碌さんは少々心細くなつた。昨日の澄み切つた空に引換へて、今朝宿を立つ時から霧模様には少し懸念もあつたが、晴れさへすればと、好い加減な事を頼みにして、たうとう阿蘇の社までは漕ぎ附けた。白木の宮に禰宜の鳴らす拍手が、森閑と立つ杉の梢に響いた時、見上げる空から、ぼつりと何やら額に落ちた。餛飩を煮る湯氣が障子の破れから吹いて、白く右へ靡いた頃から、午過は雨かなとも思はれた。

雑木林を小半里ほど來たら、怪しい空がたうとう持切れなくなつたと見えて、梢に滴る雨の音が、さあと北の方へ走る。後から、すぐ新しい音が耳を掠めて、翻る木の葉

消え。

と共に、又北の方へ走る。碌さんは首を縮めて「ちえつ」と舌打をした。

一時間ほどで林は盡きる。盡きると云はうよりは、一度に消えると云ふ方が適當であらう。振返る後は知らず、貫いて來た一筋道の外は、東も西も茫々たる青草が波を打つて、幾段となく連る後から、むくくと黒い煙が持上つて來る。噴火口こそ見えないが、煙の出るのは、つい鼻の先である。

林が盡きて、青い原を半町と行かぬ所に、大入道の圭さんが空を仰いで立つてゐる。蝙蝠傘は疊んだまゝ、帽子さへ被らずに、毬栗頭をぬつくと草から上へ突き出して、

地形を見廻してゐる様子だ。

「おうい。少し待つて呉れ。」

「おうい。暴れて来たぞ。暴れて来たぞう。しつかりしろう。」

「しつかりするから、少し待つてくれえ。」と、碌さんは一所懸命に草の中を這ひ上る。漸く追ひつく碌さんを待受けて、

「おい、何を愚圖々々してゐるんだ。」と、圭さんが遣つつける。

「だから饅飽ぢや駄目だと云つたんだ。あゝ苦しい。」

「おい、君の顔はどうしたんだ。眞黒だ。」

「さうか。君のも眞黒だ。」

圭さんは無雑作に白地の浴衣の片袖で、頭から顔を撫で廻す。碌さんは腰からハンケチを出す。

「なるほど、拭くと着物がどす黒くなる。」

「僕のハンケチもこんなだ。」

「ひどいものだな。」と、圭さんは雨の中に坊主頭を曝しながら、空模様を見廻す。

「よなだ。よなが雨に溶けて降つてくるんだ。そら、その薄の上を見給へ。」と、碌さんが指さす。長い薄の葉は一面に灰を浴びて、濡れながら靡く。

「なるほど。」

よな
火山灰。

「困つたな、こりや。」

「なあに大丈夫だ。ついそこだもの。あの煙の出る所を
目當にして行けば、譯は無い。」

「譯は無ささうだが、是ぢや路が分らないぜ。」

「だから、さつきから待つて居たのさ。こゝを左へ行く
か、右へ行くかと云ふ、丁度股の所なんだ。」

「なるほど両方とも路になつてゐるね。——併し煙の見當
から云ふと、左へ曲る方が好ささうだ。」

「君はさう思ふか。僕は右へ行く積りだ。」

「どうして。」

「どうしてつて、右の方には馬の足跡があるが、左の方に

無ささう。

は少しもない。」

「さうかい。」と、碌さんは、身體を前に曲げながら、蔽ひか
かる草を押分けて、五六歩左の方へ進んだが、すぐに取つ
て返して、

「駄目なやうだ、足跡は一つも見當らない。」と云つた。

「無いだらう。」

「そつちには有るかい。」

「うん、たつた二つ有る。」

「二つぎりかい。」

「さうさ、たつた二つだ。そらそこそこゝに。」と圭さん
は繻子張の蝙蝠傘の先で、かぶさる薄の下に、幽に残る馬

祐祐

の足跡を見せる。

「是だけかい。心細いな。」

「なに大丈夫だ。天佑ぢやないか。」

「君の天佑はあてにならない事夥しいよ。」

「なに、これが天佑さ。」と圭さんが云ひ了らぬうちに、雨を捲いて颯とおろす一陣の風が、碌さんの麥稈帽を遠慮なく吹き込めて、五六間先まで飛ばして行く。眼に餘る青草は風を受けて一度に向うへ靡いて、見るうちに色が變ると思ふと、又靡き返して元の態に戻る。

「痛快だ。風の飛んで行く足跡が草の上に見える。あれを見給へ。」と、圭さんが幾重となく起伏する青い草の

海を指す。

「痛快でもないぜ。帽子が飛んぢまつた。」

「帽子が飛んだ？ いゝぢやないか、帽子が飛んだつて、取つて来るさ。取つて来てやらうか。」

圭さんは、いきなり自分の帽子の上に蝙蝠傘を重しに置いて、さつと薄の中へ飛び込んだ。

「おい、この見當か。」

「もう少し左だ。」

圭さんの身體は次第に青い物の中に、深くはまつて行く。仕舞には首だけになつた。あとに残つた碌さんは又心配になる。

「おうい、大丈夫か。」

「何だあ。」と向うの首から聲が出る。

「大丈夫かよう。」

やがて圭さんの首が見えなくなつた。

「おうい。」

鼻の先から出る黒煙は、鼠色の圓柱まもじの各部が絶え間なく蠕動を起しつゝある如く、むくく〜と捲き上つて、半空から大氣の裡に溶け込んで、碌さんの頭の上へ容赦なく雨と共に落ちてくる。碌さんは悄然として首の消えた方角を見詰めて居る。

暫くすると、丸で見當の違つた半町ほど先に、圭さんの

首が忽然と現れた。

「帽子はないぞう。」

「帽子は入らないよう。早く歸つてこうい。」

圭さんは坊主頭を振り立てながら、薄の中を泳いで來る。

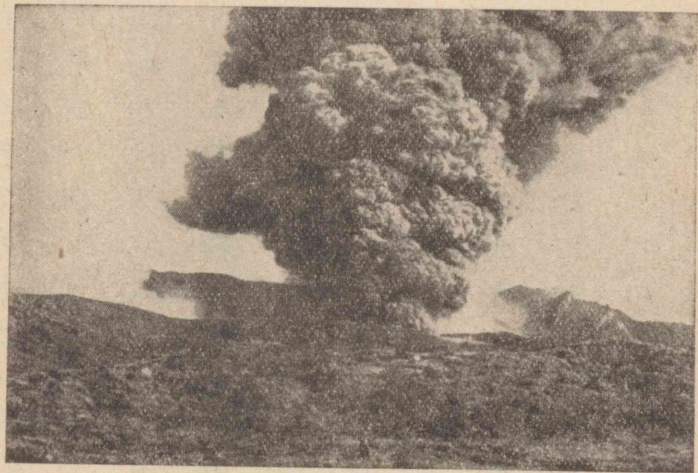
「おい、何處へ飛ばしたんだい。」

「何處だか相談が纏らないうちに飛ばしちまつたんだ。

帽子はいゝが、歩くのは厭になつたよ。」

「もういやになつたのか。まだ歩かないぢやないか。」

「あの煙と、この雨を見ると、何だか物凄くつて、歩く元氣がなくなるね。」



阿 蘇 山

「今から駄々を捏ねちや仕方がない。——壯快ぢやないか、あのむくく煙の出てる所は。」

「あのむくくが氣味が悪いんだ。」

「冗談云つちやいけない。」

あの煙の側へ行くんだよ。

さうして、あの中を覗き込むんだよ。」

「考へると、全く餘計な事だ。」

ね。」

「兎も角も歩かう。」

「はゝゝ、兎も角もか。君が兎も角もと云ひだすと、つい釣り込まれるよ。さつきも兎も角もで、たうとう饅飩を食つちまつた。」

暫くして圭さんは立止つて、黒い煙の方を見る。

濛々と天地を鎖す秋雨を突き抜いて、百里の底から沸き騰る濃いものが渦を捲き渦を捲いて、幾百噸の量とも知れず立騰る。その幾百噸の煙の一分子が、悉く震動して爆發するかと思はれるほどの音が、遠いく奥の方から濃いものと共に頭の上に躍り上つて来る。

雨と風のなかに、毛蟲のやうな眉を攢めて、餘念もなく眺めて居た圭さんが、非常に落着いた調子で、

「雄大だらう、君。」と云つた。

「全く雄大だ。」と碌さんも眞面目で答へた。

「恐しい位だ。」

暫く時をきつて碌さんが附け加へた言葉は是である。圭さんはのつそりと踵を廻らした。碌さんは黙然として尾いて行く。空にあるものは、煙と、雨と、風と雲である。地にあるものは、青い薄と女郎花と所々にわびしく交る桔梗のみである。

二人は笑々として無人の境を行く。

(二百十日)

安樂庵策傳

本名は平林平太夫。笑話作者。寛永十九年(一三三九)歿、年八十

四 笑話

安樂庵策傳

一 星取り

小僧あり、小夜ふけて長棹をもち、庭をあなたこなたと振廻る。坊主是を見附け、「それは何事をするぞ。」と問ふ。「空の星がほしさに打落さんとすれども落ちぬ。」と。「扱々鈍なるやつや、それ程智慧がなうてなる物か、そこから棹がとぶくまい、屋根へあがれ。」と。

二 湯漬

大名のもとに客あり。振舞に湯漬出でたり。その席に又客あり。それにも膳をすゑたり。又客來あり。「膳

なうて

え沸かさぬ

を出せ。」とあれども遂に出しかぬる時、物まかなふ者を呼
び出し、「何とて手間もいらぬ事のおそきぞ。湯をえ沸か
さぬか。」と叱らるゝ時、手をつかねて、「湯は御座るが、づけが
御座ない。」と申したるにぞ、どつと笑ひになりける。

三朱 槍

腑の抜けたる仁に海老をふるまひけるが、赤きを見て、
「これは生れつきか、また朱にて塗りたるものか。」と問ふ。
「生得は色が青けれど、釜にて炒りて赤うなる。」といふを合
點しゐけり。ある侍の馬に乗りたる先へ、二間まなか柄
の朱槍二十本ばかり持ちたる仲間どもの走るを見、手を
打つて、「さても世はひろし。奇特なることや。」と感ずる。

赤う。

蒸いた

「何をそなたは感ずるぞ。」と問ひたれば、「そのことよ、今の槍
の柄の色は火を焚いて蒸いたものぢやが、あれほど長い
鍋がようあつたことや。」と。

四數 珠

道行ぶりに向うより來る者を見れば、百八の數珠を首
にかけ、高野笠のやうなるを着てあゆむ者あり。うつけ
者これを見附け、手を打つて感ずる。「そなたが着たる笠
は殊の外大きいことや。何としてその數珠をば、うなじ
に懸けられた。」と問ふ。「いや、これはまづ數珠を首に懸け
て後に、笠を着て候ふ。」というたれば、「とかく物をば聞かい
では。」と。

五 留 守

借錢を乞ひに幾度人を遣せども、なすことなし。さらばとて直ただに行く。「これ亭主道善ちやうぜんに逢はん」といふ。亭主出でて、「道善は留守るすに候ふ」といふ。「いやそちは道善でなきか。」扱あつかこゝな人は、亭主の道善が直に逢ひて『留守』といふを、うたがはるゝかや。」と。

(醒睡笑)

五 面白い文章と尊い文章

五十 嵐 力

五十嵐力
文學博士、早稲
田大學教授、國
文學者、米澤市
の人。明治七年
生。
樂たのしませる。

文章は概括的にいへば思想を傳へる機關ではあるが、それにことわる文章と樂たのしませる文章と訓へる文章との三種があるやうに思はれます。ことわる文章とは、事物の道理、有様などを明瞭に現し、事を割つて紛れなく示すことを主なる目的とするもの、即ち讀者に理解させることを本領とするもので、法律の文、理學の文などがこれに屬します。樂たのしませる文章とは、意義を理解させるのみならず、人の感情を刺戟して面白がらせる文章で、詩歌、小説、戯曲などいふのがそれであり、訓へる文章と

本領

は、身の持方、世間への交り方、或は天地人生の意味あひなどいふ事を教へるもの、言ひ換へれば、修身處世、道徳義理、安心立命などいふ事に關する心得を教へるものであります。論語・孟子・バイブルといふ類の聖賢の遺書などがこれにあたりませう。此の三種の文章には各、それの目的・本領があります。無論三つの者がお互に出入して、共通し混淆して居る場合が多いでありませうけれども、其の間に争ふべからざる本領の特色があるに相違ありません。而してこれを讀む者は、よく其の特色をにらんで、其の種類相應の興味と利益とを感得すべきでありませう。

論語

孔子の言行録

孟子

孟子の言行録

バイブル

キリストの言行録

混淆

私がこゝに面白い文章といふのは、第二種の、人を樂しませる文章のことで、尊い文章とは、第三種の、人を訓へる文章のことです。

入らしめん

詩歌・小説・戯曲等の文學的な文章は、本來面白からんことを期するもの、讀者の感情や想像力に訴へて樂しませることを目的とするものであります。道徳修身上の文章は、人を導いて正善の門に入らしめんとするものであります。二者共に人間修養の糧を供するものではありませんが、其の目的と味はひとには混ぜべからざるものがあります。世の中には、本來面白いのが主眼である文學的文章を、爲にならぬと言つて斥ける人があり、本來爲に

なるのが主眼である教訓書を面白くないと言つて顧みぬ人がある。これ等はいづれも、我から我が能力を限り、趣味を偏らせるもので、廣い世界を好んで狭くする所以でありませう。外の事はともかく、書物を讀む以上は、趣味本位の文章に接して感情を養ふ事と、教訓本位の文章に接して人格を高める事と、此の二方面だけは、出来るだけ自由に、偏らずに、豊富にして、人間に磨きをかけたいものであります。

例として趣味本位の文章を一つ引いて見ます。これは徳川時代の名高い小説家、式亭三馬が「四十八癖」といふ戯作の中「つまらぬ事を苦にする人の癖」を寫した文章の

式亭三馬
本名は菊地久徳。江戸の人。
文政五年（一八二三）
没、年四十八。

一節であります。

此の間も赤酔さまのおはなしで聞いたが、天地といふものは一たい丸いもので、先づいはば手毬のやうな形だによつて、其の丸いものが循環してぐる／＼とめぐるとおつしやつたが、毬のやうにぐる／＼廻つたらば、今の地が天になつて、天が地になるだらうし、もしさうなつたら、ひよんなものだ。まづ疊を上へ敷いて階梯はしを下の方へかけねばなるまい。さうなつてくると、雨や雪が下の方から降るだらうから、傘をはいて下駄をかぶつて歩くやうにならうし、地震が頭の上でゆさゆさする。こいつは氣遣ひがなくてよしと。雷も下で

なるから落つることならずよ。あ、いや／＼これも循環の理だから、雷が這ひあがるかも知れぬて。其の時掘抜の足場はどうしたものだらう。釣瓶は風をたぐるやうにして下から汲むだらうが、雪隠などが第一に困りさうなことだ。どうぞおれ一生に循環せぬやうにしたいものだ。なぜまた天地を丸く拵へたらう。おれならば四角にがつしりとすわりをまく拵へるものを、昔の人はどうも智慧がねえ。いつそ聞かねば氣にもかゝらねえが、赤酔さまに聞いただけ、どうも案じられてならねえ。あ、まゝよ、どうするもんか。其の時は其の時だけに工夫がつくだらうが、しかし今がかん

じんだ。どういふことで天井の梁がどつさりと落ちまいものでもない。いや／＼用心はこゝだ。五尺もよけて脇の方へ寝ませう。さすれば梁が落ちてきついで怪我はない。全體二階へ寝るはあぶないて。どういふことで二階が落ちまいともいはれぬ。いやいやこれは下へ寝ることだわい。待てよ、下もまだ／＼合點がいかぬて。ひよつと二階が落ちたときには、下に居てびつしやりとつぶされるわ。はて、むゝあるわいあるわい。これは野原のやうな所へ、細い材木で、おれ一人だけの家を作つて入つてゐるが、其の事だ、其の事だ。いや／＼まてよ。どういふ事で大地が

勘辨なしな

めりこむまいものでもない。はて、こまつた。僅か五尺に足らぬ身の置所にこまるといふも難儀なことだ。おれたつた一人のからだでさへ、物事を考へて見ると不安心なものだに、親子夫婦はいふに及ばず、家來けんぞく大勢をかゝへて安閑としてゐるは勘辨なしな事だぞ。まあ元日が來ると大三十日おほみそが胸につかへるから、おれが氣にとんと油斷も隙もない。……

ざつと見ると、馬鹿げきつて犬も喰はぬ無駄言のやうであるが、これでも人を笑はせ胸のむしやくしやを散じさせて、頭を軽くし心を爽やかにする一種の趣味があります。随つて見様によつては、一種の清涼劑ともなり、心性

利用厚生

の教訓ともなるであります。

飯と菓子とが相並んで大切な食料たるが如く、働く事と寝る事とが相並んで人生を成すが如く、正善義務利用厚生に關した眞面目な文章の側には、かやうに人を樂しませ慰める面白い文章があつて、人の心を遊ばせてくれねばなりません。

人間には種々の心性があり、要求があります。遊び戯れの文章だといつて、決して書くに及ばず讀むに及ばぬものではありません。

人を訓へる文章になると、全く面目が變つて來ます。試に中江藤樹が「翁問答」の一節を御覽なさい。

中江藤樹
名は原。儒者。
近江國(滋賀縣)
高島郡小川村の
人。慶安元年(一
六八〇)歿、年四十

それ學問は、心のけがれを清め、身の行をよくするを本實とす。文字なき大昔には、もとより讀むべき書物なければ、たゞ聖人の言行を手本として學問せしなり。世の末になりて、學問の本實を取失はむことを憂へて、物の本に記して學問の鏡と定めしよりこのかた、物の本を讀むを學問の初門とするなり。しかる故に、其の心をいさぎよく、行跡を正しくする思案工夫ある人は、物の本を讀まずして一文不通なりとも、學問する人なり。其の心を明らかにし、身を修むる思案工夫なき人は、四書五經を夜晝手に放さず讀むといふとも、學問する人にあらず。心きたなくけがれて身の行よこしま

四書

大學・中庸・論語・孟子

五經

詩經・書經・易經・禮記・春秋

なるをば、凡夫の口にも犬畜生などいうていやしみぬれば、正眞の學問に志なき人は、まことの人にあらざれば、其の恥を知るべし。學問はせぬがよしといへる人に向ひて、わどのは犬畜生の如き悪人なりとそしらば、必ずさし違ふべく怒をなすべし。又心いさぎよく行儀正しき君子なりと譽めたらむには、必ず笑みをふくみてよろこぶべし。然る時は、學問はせぬがよしといへるは、其の人の本意にあらず、たゞ學問の本然を知らず、書物を讀むばかりを學問と辨へたるあやまりなり。かやうな文章を讀めば、文學的文章を讀んだ時とはまるで心持が違つて、何となく居すまひを直し、襟を正して、自

ら省み、徳に進まねばならぬやうな心持がします。殊にこれが、近江聖人が一所懸命自らつとめた修學・修徳の餘りに出た滴かと思ふと、其の片言隻句にも、いひ知れぬ威光があつて吾等に臨み、吾等を道に誘ふやうに感ぜられます。吾等は「あゝ尊い。」と思ふ感じなしに、これを讀むことが出来ません。

(作文三十三講)

次の文中の音便を説明せよ

- イ、それ程智慧がなうてなるものか (二七頁)
- ロ、今の槍の柄の色は火を焚いて蒸いたものぢや (二九頁)
- ハ、痛快だ。風の飛んで行く足跡が草の上に見える (二〇頁)

鈴木鼓村

名は映雄。音楽及び音楽史の研究者。宮城縣の人。昭和六年歿。年五十七。

團平

初代豊澤團平。義太夫節の三味線ひきである。

六名 人 團 平

鈴木 鼓 村

「御免なさいませ、團平のお師匠さんはこちらで。」と、海松布のやうな着物を着た乞食が、或日初代豊澤團平が住居の格子先へ立つた。

「お何や。どなたかいらつしやつたやうだ、行つて御覽。」と、女房は煙管を下に置きながら、長火鉢の前から聲を掛けて、臺所に立働いて居る女中を呼んだ。

女中は濡れた手を前垂で拭きながら玄關に出た。さうして右の手で襷を外しながら敷居際に手をつけて、障子をあげて來訪の客を見上げた。

「ちよつと、その何でございます、お師匠様にお目通りを、へい〜。」と、蓬頭垢面の物乞は、揉み手をしながら小腰を屈めた。

「あらつ。お前お貰ひぢやないか。おかみさん、お貰ひの癖に旦那さんに——まあ、どうでせう。」

女中は頓狂に叫んだ。

「何です、騒々しい、どうしたといふの。」と、女中の仰山な聲に釣られて女房も出て見た。

「このやうな服装を致しまして、誠にはや何でございませうが、どうぞ一生の願ひでございませうので——へい、お師匠様にちよつと。」

「そんなことは出来ません。早く行つて下さい。それに何用か知らんがお師匠様もお留守です。きつさと行つて下さい。」女房は顔をしかめた。

「そこをどうか、一生の願ひでございませうので。」と、乞食はしつこく動きさうもない。

「何だ、騒々しい。」と、主人の團平は襖から、身體半分を出して玄關を見た。

「あなた、まあどうでせう。お師匠様にお目にかゝりたいなんで、ほんとに厭なお貰ひですこと。」と、女房の聲には角があつた。

やをら

「なに、お客様か。」と、團平はやをら玄關口へ出ようとした。

「およしなさい、お貰ひですよ。」と、女房は良人の袖を控へた。

「なに、ちよつとお目にかゝりさへすれば、もうはや、この世に望もございませんで、へい。」と、格子先の聲にはうるみがあつた。

「一生の願では、あ。」と、團平はたまらず障子際に出た。してしまつた。

「へい、一生の願でございしまする。」

團平はつと進んで、その海松布のやうな着物の珍客を

見た。さうして慌てたやうに、

「これはようこそ御尊來。さあ、どうぞ。」と、自分で格子をあけて、

ぐづく

「こらつ、何をぐづくしてゐるんだ。お洗足（+）でも持つて來んか。」と、女どもを叱つた。さうして、今更のやうに恐縮がる乞食を通して、無理に上座に据ゑた。女どもは唯あきれて物もいひ得なかつた。

え堪へぬ

「むさい風體で、誠にどうも相濟みませぬわけで、へい。」と、乞食は座にえ堪へぬらしくもぢくしてゐる。

「いや、どう致しまして。して御用は——。」と、團平は賓客に對する禮を崩さなかつた。

義太夫節のこ
と。元祿の頃大
阪の竹本義太夫
の創めた浄瑠璃
節。

恥ぢる

「實はその突然の儀にございますが、私は至つて義太夫の三味線を伺ふのが好きでございまして、併し、まだその何でございます、お師匠様のを伺つたことがございませぬので、それをば一生の願とはして居りまして、御覽のやうな、はや見る影もない態さまで、何ともどうも——。」ときれぎれの言葉に境遇を恥ぢる素振は現れて居るが、その熱心の態度は眼の輝きにも知られて、さすが古今の名人の心を動かすに十分であつた。

「さうですか、それはまあよろしい、弾きませう。どうぞゆつくり聽いて下さい。おい、お茶とお菓子、それからお煙草盆はどうした。いや、どうも失禮な奴ばかりで。」と、團平は次の間に立つて、三味線を抱へて來た。「誠にはや有難いこととございまして。」と乞食は感に堪へて居る。調律の撥音ばちおとにさへ、浪花の街の動搖は静まつて、秋の午下りは夜半のやうだ。弾き出したは、志度寺のお辻の最期。」その水際立つた絃の音には、富貴もなく、貧賤もなく、人もなく、我もなく、三味線もなく、撥もなく、唯鳴りに鳴る玄妙の音ばかり。乞食の頬には涙が滂沱と傳はつた。

乞食は欣然として辭し去つて、行く處を知らなかつた。

浪花
今の大坂。

志度寺のお辻の
最期
「花の上野譽の石
碑」の一段。こ
の浄瑠璃は田宮
坊太郎の仇討を
脚色したもの。

音 締

それを飽かずく見送つた團平の眼には、うるみがあつた。その名人の眼のうるみこそ、知己に遇つた歡喜と、二度と會はれぬ別離の悲しみとを語るものであつた。やがて室に歸つた團平は、藝人の妻としての不心得を責めて、離縁を申し渡したが、同輩門弟等の詫で漸く納まつたといふことである。その名人今は天に歸つて、不思議の音締なぢめはもう耳にすることが出来ぬ。

あゝ、音樂の天才、天才の伎倆は人と共に亡びてしまふ。併し、この美はしい話は永久に生命を持つであらう。

(耳の趣味)

幸田露伴

名は成行、文學博士、文學者、東京市の人、慶應三年(三五七)生。

須らくべし

七 趣 味

幸 田 露 伴

榮 え。

趣味は人の嗜好なり、見識なり、思想なり、氣品なり、性情なり。性情は淘汰せざるべからず、氣品は須らく清高なるべし、思想は汚下ならざるを要す、見識は卑陋ひげなるなきを欲す、嗜好は一節ありたし。趣味の無下むげに低く淺きは口惜しきことあり。自ら培ひ、自ら養ひ、自ら生なましたてて、わがおのづからなる心の色の、花となり出づべき趣味をば、秀で榮えしむべきなり。

目覺むるやうなるを好むあり、心締るやうなるを悦ぶあり、淡きを好しとするあり、濃きをいとしいふあり、艶

やかに美はしきをめづるあり、沈みて鏽さびあるを望むあり。人の趣味は、人の面の形の異り、聲の色の殊なるが如くに、千差なり、萬別なり。自を以て他を律すべからず、彼に従ひて此を枉げんも亦難し。趣味は人々の心の花のおのづからなる色なればなり。花を染めて本の色ならぬ色と作し、花を洗ひて本の色ならぬ色と作さんとすとも、誠にそれ何の甲斐あらん。されども、それ〳〵の花は培ひ養ひ、よく〳〵生したてて、その自然の色を、春秋の天の下に、心ゆくばかり豊に放ち、舒ばさしむべし。人々の趣味は培ひ養ひ、よく〳〵生したてて、その自然に基づき趣味の香を、おほどかに世に發はなち薫らしむべし。

おほどかに

足らざることを知るは、滿つるに至るの路なり。至らざるを悟るは、上に向ふの途なり。わが趣味の猶足らざるを知り、猶至らざるを悟る者は幸なり。その人の趣味將に漸く進み、漸く長ぜんとす。わが趣味の幼きをも省みで、わが善しとするものを必ず善しとし、わがをかとするものを何時もをかしとして、高きに遷り、低きを改むることをせぬ者は幸なし。その人の心の花既に石と化りて、生命を失ひ居ればなり。

簪かんざしの必ず黄金ならんことを欲し、衣の必ず縮緬ちぢみならんことを欲するは、欲望といふものなり、趣味といふものはあらず。欲望は我を桎梏す、自在なし。趣味は我を繫

桎梏

雞兒腸



落霜紅



怡悅

縛せず、自由あり。趣味低く欲望強ければ、その欲するところの物を得ざるに當つては、苦惱千萬端ならん。趣味高く欲望淡くば、その欲するところの物を得ざるも、適樂一二様のみならず。雞兒腸の花の幽なるを簪にすとも、山吹の花の香なきを簪にすとも、薔薇の一輪の白く含めるを簪にすとも、落霜紅の數顆の紅なるを簪にすとも、その人の趣味より見て善しとなさんには、木の端、竹の片を簪にすとも、また満足と喜悅とはあるべし。時に應じ處に隨ひて、何の時にも那の處にも怡悅の情を見出し得るは、趣味のなすところなり。その物を得ざれば苦しみ、その願を遂げざれば惱み、わが心を外の物の奴婢として、そ

の使役する所となるは、欲望の然らしむるなり。欲望は人を苦しめ、趣味は人を活かす。趣味饒かなる人は幸なるかな。

おのれに得ることありて人に待つことなき、之を徳と云ふ。心に怡しむことありて物に累はさるゝことなき、之を趣と云ふ。苟もよく趣味を存するや、荒涼凄寒の境に在りとも、亦以て樂しむべし。培ふべし、養ふべし、生し立つべし、人の趣味性。

(洗心録)

荒涼凄寒

高濱虛子
名は清。小説家。
俳人。松山市の
人。明治七年
生。
聯想

八 俳句の解釋

高 濱 虚 子

俳句を解釋する場合に、最も大事なことは聯想といふことである。これは僅に十七文字であるといふことが大なる原因を爲してゐる。

俳句は僅に十七文字であつて、而も成るべく深い意味、若しくは強い意味を運ぼうとするために、元來文字其の物が一つの符牒であるが、更に俳句に使はれる場合には、其處に作者と讀者との間に特別な約束が出来て、普通の文章若しくは談話などで使はれる文字が運ぶ意味よりも、一層複雑な意味を簡単な文字で運ぶやうになつてゐる。

元祿の俳句などに較べると、天明の俳句の方が一層此の約束が複雑になつて來てゐるし、更に進んで明治の俳句になると、更に言葉が簡略になり、さうして澤山の意味を運ぼうとするやうになつて來て、段々文字の節略が多くなつて來る。其の節略に従つて作者と讀者との間に約束される聯想といふものも、段々と多くなるといふやうになつて來た。

例へば、

菊の香や奈良には古き佛たち

といふ芭蕉の句がある。

これなどは、普通の文章を解釋する積りで解釋したな

馥郁
蒼枯
看做す

らば、殆ど何の事だか分らなくなる。けれども、俳句の上には、其處に特別な約束があつて、「佛たち」といふ名詞で止つてゐる下には、「が澤山ある」といふやうな意味を自然に含ませることになつてゐる。又菊の香といふ名詞の下には、「の馥郁たるが如く」といふ文字とか又、「溫雅なる色彩」とか、「蒼枯な感じ」とかいふやうな、菊の花に附屬する種々の聯想が、やはり省約されてゐるものと看做すことが出来る。

そこで、此の句の意味は、菊の花の人に與へる感じが、奈良の古き佛達が人に與へる感じと、何處かに似通つたところがあるといふ、其の感じを作者が表したものである

と解釋するのである。若しも長い文章でこれを表さうとするならば、數十言、若しくは數百言を費さなければならぬのである。けれども、俳句では、かやうに僅か十七文字で其の複雑な意味を運び得られるのである。

これは俳句といふものが、特別に約束された文字の働きを持つてゐるからである。

次には、天明の蕪村の句に、

鮎くれて寄らで過ぎゆく夜半の門

といふ句がある。

此の句の意味を一通り解釋して見ると、自分の住つてゐる家の戸口で夜半に人聲がする。起きて行つて見る

蕪村
本名は谷口寅
佛人。攝津國大
阪府の人。天明
三年(西曆)癸卯、
年六十八。

來よう。

と、自分の知つてゐる某が、今日夜釣か何かに行つて取つた鮎を少し分けてやらうといつて、それをくれた。さうして自分が「まあ、はいらぬか。」といつたけれども、其の人は「いや、今晚は遅いから、又來よう。」とか何とかいつて、其のまゝ歸つて行つた。かういふ意味を表してゐる。けれども、此の句の中には誰が鮎をくれたともいつてないし、又單に夜半の門とあるだけで、門がどうしたのか、其の邊は極めて曖昧になつてゐる。しかし、俳句の約束として、「鮎くれて」といふ文字の前には、「或人が」といふ意味が自然に含まれてゐるし、「門」といふ言葉からして、「門前で人がくれた。」又「主人がそれを受取つた。」といふやうな言葉

が、自然に其處に含まれてゐることが分る。

若し何も俳句のことを知らない人が此の句を見たならば、「門」が鮎をくれたのか、「門」が過ぎて行つたのか、ちつとも其の邊の意味が解せないかも知れないが、其の中には種々な言葉が略されてゐて、さうして其の略されてゐることは、俳句に取つては普通の約束であるといふことが分つて見ると、直ぐに此の意味が解釋されるのである。次に明治の句にはいろ／＼あるが、先づ手當り次第に一句を拾ひ出して見ると、

町淋し雨の筈貸家札

といふ飄亭の句がある。

飄亭
本名は五百木良三。俳人。愛媛縣の人。

此の句なども、ちよつと俳人以外の人が見たならば、何をいつたのだから分らないかも知れないが、此の「雨の筍貸家札」といふ前には、澤山な言葉が省略されてゐるのである。「雨の筍」と「貸家札」との二つの間には、筍が生えてゐる、それは其の貸家の塀の内とか、竹垣の内とか、何處かに長く伸びて生えてゐるといふことを想像しなければ、此の景色が何だか分らないのである。

更にこれをいひ換へて見れば、かうである。古びた貸家が一軒ある。其の貸家の表には貸家札が下つてゐる。其の貸家の庭には、筍が、人が取らないために伸びて、塀の上まで高く突き出てゐる。さうして雨がざあ／＼降つ

てゐる。其の町は人通りなども少い町で、荒れ果てた士族町か何かである。先づかやうな複雑な景色が、殆ど符牒の如く「町淋し」といひ、「雨の筍」といひ、「貸家札」といふ中に想像されるのである。

これ等も随分文字を省略して、俳句獨得の想像に俟たなければ解釋されない句である。

(俳句の作りやう)

次の文より代名詞を選べ

主人がそれを受取つたといふやうな言葉が自然にそこに含まれてゐる(六〇頁)

九 春 夏 秋 冬

山門をぎいと鎖すや秋の暮

正岡子規

風や海に夕日を吹き落す

夏目漱石

元日や一系の天子不二の山

内藤鳴雪

梅三株漁村を守る社かな

高濱虚子

日本は男うれしき幟かな

松瀬青々

正岡子規

名は常規。俳人。歌人。松山市の人。明治三十五年歿、年三十六。

夏目漱石

一二頁頭註参照。

内藤鳴雪

名は素行。俳人。松山市の人。大正十五年歿、年八十。

高濱虚子

五六頁頭註参照。

松瀬青々

名は彌三郎。俳人。大阪市の人。昭和十二年歿、年六十九。

一〇 誠 の 説

三 浦 梅 園

一勺の水を海に入れて、海の水増したりといはむは愚なり。増さずといふは妄なり。水を加ふる所は我にして、増すと増さざるとは我にあらず。我にあらざるものは強ひて其の辨（分別）を求めずして可なり。我にある所の誠を盡す、これ君子の道なり。誠とは虚言を言はざる事と（むねを盡す、事、言、事、言、事、言）のみ心得たらむは、愚なることなり。或人、司馬温公に誠に入る道を問ひければ、「妄語せざるより入る。」とぞ答へける。成程妄りに語らず、虚言を言はぬより、誠の道には入るなれども、虚言を言はぬを誠とは言はぬなり。（つて、虚言を）偽を

三浦梅園

名は晉。儒者。豊後國（大分縣）の人。寛政元年（一四九）歿、年六十七。

司馬温公

名は光。支那宋代の政治家。學者。西紀一〇八六年歿、年七十八。

或人云々

「劉安世問、光一言可_レ以終身行之者。光曰、其誠乎。安世問、其所_レ從入。曰、自_レ不_レ妄語入。」（宋）

罌粟



煙草



言はぬに對する信は小さし。偽なきに對する誠は大なり。罌粟の子、煙草の實は至つて小さきものなり。地に落さば目にもかゝらぬやうなれども、内に一つの誠といふものありて、奪ふべからず、隠すべからず、味ますべからず、覆ふべからず。其の時至るに及んでは、芽を出し、葉を生じ、花を開き、實を結ぶ。其の子を水に腐らし、火に焼きて、芽を出さずといふは、其の子の咎ならむや。是によりて物の子を實といふ。實は即ち誠なり。少しにても誠ならざるもの有りて、腐りた



三浦梅園

るものは生ぜず、痛みたるは苗瘁く。人の誠も猶此の如し。

昔、衛の靈公といひし君、夜、夫人南子と共に坐し給ひけるに、遙に車の轟く聲しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過ぎて又鳴りけり。靈公、誰なるべきか。と南子に問ひ給ひければ、是は蘧伯玉なるべし。禮に、『下公門、式路馬。』といふことあり、『忠臣、孝子、不爲昭々、信節、不爲冥々、惰行。』といへり。蘧伯玉は衛の賢人なり。夜なればとて禮をば廢せじ。』といひけり。靈公、人を遣して見しめけるに、果して伯玉にてぞありける。人知るまじとて欺くは妄なり。四知といひて、人知ら

衛の靈公

支那春秋時代の衛の君名は元西紀前四九三年卒す。此の話は「小學」の内篇にある。

蘧伯玉

名は瓊、衛の賢大夫として知られてゐる。

禮

禮記、四十九篇、五經の一。支那の古代の禮書。其の曲禮第一に、「大夫士下、公門、式路馬。」とある。

四知

天知る、地知る、人知る、我知る。

ずと思ひても、天知る、地知る、神知る、我知る。いかでか掩ひかくすべき。たとへば一升の米、日々に二三十粒を取らむとも、措かむとも、知れざるべし。然れども久しく措く時は増し、取る時は減る。草木も、朝見し色も、暮に見し色も、昨日見しも、今日見しも、さして變らぬやうなれども、誠といふものは少しも間斷なきゆるるに、いつ太るともなけれども、次第に太るものなり。

人の見ぬ間とて間斷あらば、草木も思ふまゝには伸びもすまじ。深き谷の蘭も、遙なる山の紅葉も、人なしとてもよく薫り、美しく照ればこそ、人至りたる時も香清く色麗しけれ。人の至るを待ちて香を放ち色を出さむとせ

拭きたらむ

如^ル見^ル其^ノ肺^ヲ肝^ニ、
「人之視^ル己^ヲ、如^ク見^ル其^ノ肺^ヲ肝^ニ、然^レ」
(天^ノ學)

ば、筈にあふことあるべからず。常々心に掛けて掃灑^{はきすい}したらむ座席と、俄に蜘蛛の絲取り柱拭きたらむとは、いかでか見紛ふべき。人平生をたしなまずして、其の期に臨み偽り文らむは、誠の俄掃除なるべし。「如^シ見^ル其^ノ肺^ヲ肝^ニ」とて、人欺くべからず、たゞ我が心を欺くなり。

なきなぞと人には言ひてありぬべし心の問はば
いかゞこたへむ

此の歌の如く、人をば欺くべけれど、心に心を顧みていかに今の如く誠ならざる事をばせしぞ、いひしぞ、人をば欺くになどて自らの心を自ら欺ける、と咎めたらむには、自ら恥かしくひとり居ても頼^{たの}より汗出づべし。(梅園遺書)

國木田獨歩

名は哲夫。小説家。千葉縣の人。明治四十一年歿。年三十八。昨日も今日も云。明治二十九年九月七日の日記の記事。降りみ降らずみ

二 武藏野

國木田獨歩

昨日も今日も南風強く吹き、雲を送りつ雲を拂ひつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるゝとき、林影一時に煌めく。

これが今の武藏野の秋の初である。林はまだ夏の緑のまゝでありながら、空模様が夏と全く變つてきて、雨雲の南風につれて、武藏野の空低く頻りに雨を送る。其の晴間には日の光水氣を帯びて、彼方の林に落ち、此方の杜にかゞやく。自分は屢、思つた、こんな日に武藏野を大觀することが出来たら如何に美しいことだらうかと。

秩父嶺
埼玉縣秩父郡に
在る諸山。

昔の武藏野は、萱原のはてなき光景を以て絶類の美を鳴らして居たやうに言ひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。即ち樹は主に楡の類で、冬は悉く落葉し、春は滴る許りの新緑萌え出づる其の變化が、秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、綠蔭に、紅葉に、様々の光景を呈する其の妙は、一寸西國地方又東北の者には解し、かねるのである。元來日本人は、これまで楡の類の落葉林の美を餘り知らなかつた様である。

秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺の林の中に

坐してゐたことがあつた。朝から小雨が降りそゞぎ、其の霽間にはをりく、生暖かな日かげも射して、まことに氣まぐれな空合ひ。あはくしい白雲がそら一面に棚曳くかと思ふと、不圖またあちこち瞬く間雲切れがして、無理に押分けたやうな雲間から、澄みて伶俐しげに見える眼の如くに、朗らかに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は坐して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で微に戦いだだが、其の音を聞いた許りでも季節は知られた。それは春先の面白さうな笑ふやうなさゞめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、長たらしい話聲でもなく、また秋の末のおどお

しめやかな

どしたうそさぶさうなお饒舌でもなくて、只漸く聞き取れるか聞き取れぬ程のしめやかな私語の聲であつた。そよ吹く風は忍ぶやうに梢を傳つた。照ると曇るとで、雨にじめつく林の中の様子が間斷なく移り變つた。或はそこに在りとある物總べて一時に微笑したやうに、隈なくあかみわたつて、さのみ繁くもない樺のほそぐとした幹は、思ひがけずも白絹めく優しい光澤を帯び、地上に散り敷いた細かな落葉は、俄に目に映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしつたやうなバーポロトニクの見事な莖、しかも熟れ過ぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限もなくもつれつからみ

バーポロトニク
蕨の類

つし目前に透かして見られた。

或はまた四邊一面俄に薄暗くなりだして、また、く間に物のあいろも見えなくなり、樺の木立も、降り積つた儘でまだ日の眼に逢はぬ雪のやうに、白くおぼろに霞む。——と、小雨が忍びやかに怪しげに私語するうちにばら／＼と降つて通つた。樺の木の葉は、著しく光澤が褪めても、流石に尙青かつたが、只そちこちに立つ稚木が、今は總べて赤くも黄色くも色づいて、をり／＼日の光が、今は雨に濡れた許りの細枝の繁みを漏れて、滑りながらに脱けて来るのをあびては、きら／＼ときらめいた。

あゝる

をり／＼

ツルゲネーフ
露國の文學者
(西紀二八六一—二八
七)

二葉亭
本名は長谷川辰
之助、號は四迷
小説家。愛知縣
の人。明治四十
二年歿。年四十
六。

これはツルゲネーフの書いたものを、二葉亭が譯した短篇の冒頭にある一節であつて、自分がかゝる落葉林の趣を解するに至つたのは、此の微妙な敘景の筆の力による所が多い。これはロシアの景、而も林は樺の樹で、武藏野の林は檜の樹、植物帯からいふと甚だ異つて居るが、落葉林の野である事は同じである。

檜の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く。風が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉が高く大空に舞つて、小鳥の群かの如く遠く飛び去る。木の葉が落ち盡せば、數十里の方域に互る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高く此の

上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄みわたる。遠い物音が鮮やかに聞える。自分は十月二十六日の記に、「林の奥に坐して四顧し、傾聽し、睇視し、默想す。」と書いた。此の耳を傾けて聞くといふことが、どんなに秋の末から冬へかけての、今の武藏野の心に適つてあるだらう。秋ならば林の中より起る音、冬ならば林の彼方遠く響く音。

鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすたく蟲の音。空車、荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散らす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連で遠乗に出かけた外

國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲、それも何時しか遠ざかりゆく。獨り淋しさうに道をいそぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣の林でだしぬけに起る銃音。自分が一度犬をつれて近處の林を訪ひ、切株に腰をかけて書を讀んで居ると、突然林の奥で物の落ちたやうな音がした。足もとに臥て居た犬が、耳を立ててきつと其の方を見詰めた。それきりであつた。多分栗が落ちたのであらう、武藏野には栗の樹も随分多いから。

若し夫れ時雨の音に至つてはこれほど幽寂のものはない。山家の時雨は我が國でも和歌の題に迄なつてゐ

鷹揚な

るが、廣い／＼野末から野末へと、林を越え、杜を越え、田を横ぎり、又林を越えて、しのびやかに通り行く時雨の音の如何にも幽か^{しう}で、また鷹揚な趣があつて、優しく懐しいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は嘗て北海道の深林の時雨に逢つた事がある。これは又人跡絶無の大森林であるから、其の趣は更に深いが、其の代り、武藏野の時雨の更に人懐しく、私語くが如き趣はない。

秋の中頃から冬の初、試に中野あたり、或は澁谷・世田ヶ谷、又は小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の疲れを休めて見よ。これ等の物音、忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉風なきに落ちて微

中野・澁谷・世田ヶ谷
今、東京市中野區・澁谷區・世田ヶ谷區
小金井
東京水道の上流。櫻の名所。

星斗
關干

な音をたてる。而して其も止んだ時、自然の靜肅を感じ、永遠^{エターナル}の呼吸身に迫るを覺ゆるであらう。

武藏野の冬の夜更けて星斗關干たる時、星をも吹き落しさうな野分がすさまじく林をわたる音を、自分は屢、日記に書いた。風の音は人の思ひを遠くに誘ふ。自分は此の物凄^{ものぢ}い風の音の、忽ち近く忽ち遠きを聞いて、遠い昔からの武藏野の生活を思ひつゞけた事もある。熊谷直好の和歌に、

よもすがら木の葉かたよる音きけば

しのびに風のかよふなりけり

といふがあるが、自分は山家の生活を知つて居ながら、此

熊谷直好
國學者。山口縣
の人。文久二年
(三五三)歿、年八
十一。

正岡子規
六四頁頭註參照

三箱根路

正岡子規

われうき世の旅の首途かどしてよりこゝに二十五年、南海の故郷をさまよひ出でしよりこゝに十年、東都の假住居を見すてしよりこゝに十日、身は今旅の旅に在りながら、風雲の思ひなほ已み難く、頻りに道祖神にさわがされて、霖雨の霽間をうかゞひ、草鞋よ脚絆よと身をつくるひつ、一箇の袱紗包をうき世のかたみに擔うて、飄然と大磯の客舎を出でたる後は、天下は股の下、杖一本が命なり。

旅の旅そのまた旅の秋の風

國府津・小田原は一所懸命にかけぬけて、はや箱根路へ

大磯
神奈川縣中郡大磯町
國府津
同縣足柄下郡國府津町
小田原
神奈川縣小田原市

かゝれば、何となく行脚の心の中嬉しく、秋の短き日は全く暮れながら、谷川の音耳を洗うて、煙霧模糊の間に白露光あり。

白露の中にほつかり夜の山

湯本に辿り着けば一人のをのこ袖を控へて、「いざ給へ、好き宿まるらせん。」といふ。引かるゝまゝに行けば、いとむさくるしき家なり。前日來の病もまだ全くは癒えぬに、この旅亭に一夜の寒氣を受けんことは氣遣しく、やや落膽したるが、まゝよ、これこそ風流のはじめ、行脚の眞面目なれ。

だまされてわるい宿とる寒夜かな

湯本
神奈川縣足柄下郡湯本村。箱根口の北麓。

つぎの日まだき起き出でつ。一天晴渡りて、瀧の水朝日にきらつくに、鶴鴿の小岩づたひに飛びありくは逃ぐるにやあらん、はた此方へとしるべするにやあらんと、草鞋の運び自ら軽らかに、箱根街道のぼり行けば、鴨の聲左右にかしまし。

我がなりを見かけて鴨の鳴くらしき

色鳥の聲をそろへて渡るげな

秋の雲瀧をはなれて山のうへ

病みつかれたる身の、一足登りては一息ほつとつき、一坂登りては巖端に尻をやすむ。駕籠舁の頻りに駕籠をすゝむるを耳にもかけずのぼり行けば、

二子山
箱根中央火山の
一峰。

山路の菊野菊ともまたちがひけり

どつさりと山駕籠おろす野菊かな

石原に痩せてたふるゝ野菊かな

などおのづから口に浮みて、はや二子山鼻先に近し。

谷に臨めるかたばかりの茶屋に腰掛くれば、秋に枯れたる婆様の挨拶、何となくものさびて面白くおぼゆ。「名物ありや。」と問へば、「力餅といふものあり。」とて、大きな餅の焼きたる二つ三つ、盆に盛りて来る。

山姥の力餅賣るすゝきかな

など戯れつゝ、力餅の力をかりて上ること一里餘、杉樫の大木道を夾み、元箱根の一村目の下に見えて、秋さびた

元箱根
箱根山の頂上、
箱根神社の在る
處。

るけしき、さながら仙源に入りたるが如し。

紅葉する

木立もなしに山深し

千仞の山嶺を攀ち、幾片の白雲を踏み碎きて登り着きたる山の頂に、鏡を磨き出せる蘆の湖を見出したる時の心廣さよ。餘りの絶景に恍惚として立ちもえ去らず、木のくひぜに坐してつくぐと見れば、山更にしんしんとして、風吹かねども冷氣冬の如く足もとよりの



蘆の湖

ぼり、腦天にしみ渡るこゝちなり。波の上に飛びかふ鶴は、忽ち來り忽ち去る。秋風に吹きなやまされて、力なく水にすれつあがりつ胡蝶のひらくと舞ひいでたる、箱根の頂とも知らずてや、いと心強し。遙の空に、白雲とのみ見つるが上に兀然として現れ出でたる富士、こゝからも猶三千仞はあるべしと思ふに、更にその影を幾許の深さに沈めてさゝ波に縮みよせられたる、またなくをかし。これより山を下るに、見渡すかぎり皆薄なり。箱根の關はいづちなりけんと思ふものから、問ふに人なく、探るに跡なし。

關もりのまねくやそれと來て見れば

尾花がすゑに風わたるなり

薄の匂を得たり。

大方はすゝきなりけり山の上

伊豆相模境もわかず花すゝき

明治維新前までは、金紋先箱の行列整々として、鳥毛片鎌など威勢よく振立てく、行きかひし街道の繁昌も、あはれものの本にのみ残りて、草刈るわらべの小路一筋を除きて外は、草の生ひいでぬ處もなく、僅に行列のおもかげを薄の穂にとゞめたり。

槍立てて通る人なし花芒

子規全集第一巻旅の旅の底

金紋先箱・鳥毛片鎌



松平定信

號は樂翁。田安宗武の第七子。磐城國(福島縣)白河の城主松平定邦の嗣となる。幕府の老中。文政十二年(三十四)歿、年七十二。

未だ形へ、^{上は説明}いかでか此の身有らむや。さて、其の生ける時には、事へて誠を盡し、あへざるが故に、祭祀の禮あり。

一三 祭祀の禮

松平定信

人は父母に本づき、萬物は天地に本づきて生ずるものなり。先祖無くば、いかでか父母有らむ。父母無くば、又いかでか此の身有らむや。さて、其の生ける時には、事へて誠を盡し、あへざるが故に、祭祀の禮あり。祭祀の禮は人道の本なり。こゝに於て誠を盡さざる時は、人道闕く。譬へば、父母先祖は木の根幹の如し。もろもろの枝葉・花實は、伯叔父兄弟從兄弟、其の外の諸親類、子孫の如きものなり。其の木の根に培ひ、水そゝぎて、根本堅ければ、大風にも倒れず、炎暑にも枯れずして、枝葉・花

培倍

掘堀

實時に従ひ茂り榮ゆるなり。

若し其の根のくつろぎ搖ぐにも、培はず、水そゝがずして捨て置くのみならず、あまつさへ其のほとりの土を掘りのけ、根を押動かす時は、或は大風に吹き倒され、或は炎暑に枯るゝは必然の事なり。枝葉ばかり大切に、それにして、水そゝぎたりとも、其の根本枯れたるうへは、枝葉のみ榮ゆべき理無からむ。人の父母先祖に疎なるは、みづから木の根を搖がして倒すに異ならず。其の根枯るれば、かずくゝの枝葉も従ひて枯るゝは、皆人の知る所なり。されば父母先祖に厚くして、子孫の繁榮を祈るべきことなり。

みづから

榮えむ

さるに、父母先祖に疎にして、頼むべき筋も無き佛神に媚びへつらひて、子孫の榮えむことを願ふは、道理無き事なり。これを譬へていはば、松の木の花り榮えむことを求むとて、梅の木に培ひ、水そゝぐが如し。松の榮えむことを求めば、其の根に培ひ、水そゝぐに若かざらむ。梅の榮えむことを願はば、其の根を養ふに若くこと無からむ。これ實理にして、しるしあることなり。

但し、父母先祖に厚くするは、全く子孫の繁榮を願ふのみにはあらず。本に報ずる微意なり。父母存生の中に、事うまつるを計るに幾何も無し。幼にしては未だ事ふる道を盡さず。稍成長しては力を盡すことを知ると雖

微一微

たとへ。

報 報い。
身内 みうち。
報 報い。
身内 みうち。
報 報い。
身内 みうち。
報 報い。
身内 みうち。

も、或は公務に暇無く、或は文武の學、又は親戚の交、他人の
應對、職業の務め等によりて、父母の膝下に在りて事ふる
ことを得ざる日多し。たとへ生涯父母の膝下を離れず
して事へたりとも、限りなき恩をば報い盡すべきに非ず。
父母既に身まかりて後は、悔の八千度も甲斐なし。故に、
歿後には其の神靈に事へて、在すが如く誠を盡すは、已む
ことを得ざる至情を盡すのみなり。子孫たるもの先祖
に厚くば、先祖の神靈悦ばざらむや。さあらば、祈らずと
ても子孫の繁榮疑ふべからず。先祖の神靈に子孫を守
らざる神靈有らむや。

然るに、愚なるものは父母祖先の神靈を粗末にして、願

驗 儉 險 檢

神は非禮を享け
ず
「神、不享非
禮。」
(論語註)

ふべき筋も無き神佛にても、靈驗あらたかなりといへば、
此處の神に、彼處の佛に、多くの金銀を擲ち、我が身及び子
孫の福を願ふは惑へるなりけり。其の金銀を以て民を
救ひ、善事に用ひるは、祈らざる祈にして、自ら其の身及び
子孫にも福有るべきことは必然の道理なり。「神は非禮
を享けず。」といふに、非禮の祈禱に多くの金銀をつひや
すは、惜しむべきことならずや。

(燈前漫筆)

大月桂月
名は芳衛、文章家、高知市の人、大正十四年歿、年五十七。

大月桂月

一四 清淨の國

大町 桂月

我が國の特質は少からざれども、特質中の特質ともいふべきは、清淨の國なることは是なり。

日本國民は一般に清淨の美を愛す。その心清淨なり、その衣、その食、その家清淨なり、その國一體が清淨なり。清淨の美を解せざるものは、到底日本を解するを得ざるなり。

敷島の大和心を人間はば

朝日に匂ふ山櫻花

この歌が日本人一般に愛誦せらるゝは、國民精神の清

敷島の云々
本居宣長の歌。

愛誦

清清
映發
暉爽

美を歌ひ出でたればなり。一體、朝は一日の中にて最も清々しき時なり。空に些の曇もなき朝、東天に朝日の輝き出づるは實に清爽なるものなり。その清暉に、櫻花中の粹たる山櫻のぼつと映發せるは、なほさらに清々しきものなり。朝晴天、日の出、山櫻、これだけの好き道具がそろはば、何人か爽快を覚えざるべき。これ即ち大和魂の本體なり。大和魂は即ち清淨の粹なり。櫻花は散りぎはが潔し、日本男子の死を惜しまざるに似たりなどいふは枝葉のことのみ。

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ

富士のたかねに雪は降りける

田子の浦云々
山部赤人の歌。

扶桑
八朶玲瓏

喧傳
琴線

月雪の云々
其角の句

十四夜
元祿十五年(三三)
三月二十四日
の夜

其角
姓は寶井。芭蕉
の高弟。寶永四
年(三三)歿。年
四十七。

緑波一面鏡の如き田子の浦、そのあなたに何處より見ても形の變らざる扶桑一の靈山の、八朶玲瓏、天をさゝげて立てるは、これまた清淨の極みにあらずや。この歌が名歌として世に喧傳せらるゝも、畢竟この美の琴線に觸れたればなり。

月雪の中や命のすてどころ

積雪白うして四邊に聲なく、十四夜の寒月獨り大いに牙えたり。この夜、この雪を踏み、この月光を浴びつゝ、氷刃をきらめかして亡君の仇を報いんと討入るは、決死の四十七烈士。天も清し、地も清し、人も清し。當夜吉良邸の隣屋敷にて催されし俳會に列せし其角その人は、元來

大高子葉
大高源吾のこ
と。四十七士の
一人。元祿十六
年(三三)歿。年
三十一。
復讐

心の結晶
妖艶

血性の快男子にして、清淨の美を心解せる人なり。而して義士の一人たる大高子葉は實にその俳友たり。月清きその雪の夜、無量の感慨は發してこの十七文字となる。實によく復讐の眞況と本體とを捉へ得て、清淨の美を極めたりと謂ふべし。

歌も俳句も秀逸と稱せらるゝものは、多くはこの清美を捉へたるものなるが、その他の美術・文藝一つとしてこの心の結晶ならざるはなし。花に對する感じの如きも亦然り。近時外國趣味の入り來るにつれて、妖艶なる草花も輸入せられたれど、梅や、櫻や、蓮や、菊や、水仙や、昔も今も日本國民の一般に愛する花は何れも清淨なり。建築

西行の歌
「何事のおはしま
 すかは知らねど
 もかたじけなき
 に涙こぼるゝ」
 西行法師—俗名
 は佐藤義清。歌
 人。建久元年（
 一一五〇）寂、年七十
 三。

滄海
 開關

に於ても亦然り。日光の東照宮、淺草の觀音堂を見る時、我々日本人はたゞ華麗を感じるのみにして、尊さを感じること薄し。然るに、一たび去つて伊勢の神宮に詣でんか、千木高知れる建築、清淨の美を極めて、そゞろに西行の歌のしのぼるゝを覺えずんばあらず。若し伊勢の神宮に向つて壮大を求め、華麗を求むるものあらば、これ眞の日本國民たる素質に缺けたるところある者と謂はざるべからず。

滄海の中にありて、山青く水清き我が日本は、土地そのものがすでに清淨なり。開關以來、未だ曾て外國に汚されざる我が光輝ある歴史が、すでに清淨なり。他民族の

ものあはれ

血液を多く混ぜざる我が民族の血統が、すでに清淨なり。加之、我が國民は善を好みて惡を憎み、正に就きて邪を排し、直を愛して曲を嫌ひ、弱を扶けて強を挫き、よく忠に、よく孝に、よく義に、よく勇に、風流をさへ解して、ものあはれを知れる清淨なる人民なり。我が日本が古來東海の君子國と呼ぶるゝも、亦宜なるかな。

（桂月全集）

次の文より動詞を選び、かつ活用の種類を述べよ

自分は山家の生活を知つて居ながら此の歌の心をげにもと感じたのは實に武藏野の冬の村居の時であつた（七九頁）

堀口大學
詩人。東京市の
人。明治二十年
生。

予し
天の終りに念
をもイザサ助詞

一五 雪

堀口大學

雪は降る！ 雪は降る！
見よかし、天の祭なり！

空なる神の殿堂に
冬の祭ぞ、たけなは 閑なる！

たえまなく雪は降る。
をどれかし、つぞら 鶉らよ！

うたへかし、ひよどり 鶉ら。

降る雪の白さの中にて！

いと聖く雪は降る。

沈黙の中に散る花瓣！

雪はしとやかに

踊りつゝ地上に来る。

雪は降る！ 雪は降る！

白き翼の聖天使！

我等が庭に、身のまはりに、
さゝやき、歌ひ、雪は降る。

降り来るは恵みの麵麴なり！
小さく白き雪の足！

地上にも、屋根の上にも、
いと白く雪は降る！

冬の花弁の雪は降る！
地上の子等の祭なり！

(詩集「月光とピエロ」)

木原均

理學博士。京都
帝國大學教授。

佗一説

一六 スキー禮讚

木原均

年を追うて冬を待佗びる人々の多くなつたことは喜
ばしい。早春消えゆく雪を恨めしいと歎ずる人々のあ
ることは嬉しい限りである。

何故に吾々は過去において、冬を暗黒な世界として嫌
悪しないまでも喜ばなかつたか。これはすべて吾々の
南國式の生活様式と、ウィンタースポーツの缺如によ
ると考へてよからう。ところがスケートが行はれ、スキ
ーが試みられるやうになつて、従來の消極的な冬の生活
様式の殻をうち破つて、冬の寒さを利用し、冬にのみ恵ま

消極的—積極的

れる雪と氷とを利用する人々が多くなつたことを禮讚したい。彼等は寒さに對して逃足を踏まない。これを研究し、寧ろこれを樂しまうとしてゐる。彼等とはウインタースポーツを爲す者のことである。

ウインタースポーツなる言葉を使用すると、ある人々は直ちに富豪がサンモリッツあたりで恣に享樂する事を聯想するかも知れないが、それはその極端な例である。片田舎の樵夫の子にも、都市の陋屋に住む小僧にもこの樂しみは普及し得る。下駄の底に打ちつけた古鐵片でもスケートの味が味ははれるし、草鞋にくゝりつけた木片でもスキーの味に酔ふことが出来る。また小さな塵

サンモリッツ
アルプス山脈中
の一峯。

取に乗つて橇そりの痛快味を味はふ子供等さへもある。

スキー禮讚者は、スキーの形がすでに美しいといふ。先端の曲り工合などは特に美しい。スキーの出来ない夏の盛りでも、時々スキーを取出しては愛撫する人々も決して少くはない。スキーは木片ではあるが、藝術品である。スキーに使はれてをる附屬具といへども決してスキーに負けてはゐない。雪輪のついたステッキ、鋏の打つてある重々しい靴、明るい色の襟卷やバンド、これらは何れも冬を明るくしようがための努力に外ならないであらうが、それも嬉しい事の一つである。

併し、スキーが何よりも優つてゐる——或人をして、人

しょう。

生最大の快事といはしめるのは、雪に掩はれた山野を、或は六十哩の速力で滑降し、或は又沈黙の森に逍遙し、又或時は氷原の境に達し得るからではなからうか。勿論その技には巧拙はあるが、雪の上で轉がり通すことも矢張り痛快なのである。或人が、往來で轉ぶと、顔をしかめて後をも見ずにこそくと走つてゆくが、スキーでこそ天真爛漫に笑つてをられる。」と言ふ意味の話をした事がある。滑り得て面白く、轉んでも亦面白いのである。

こゝで思ひ起すのは、スキー場といふ言葉である。スキー場といへば或限られた範圍の斜面の事をいふかのやうに考へられるやうであるが、此の考へは是非とも打

破したいものである。「スキーは吾々が冬の自然の懷に入る唯一の道案内であつて、甲地から乙地に行くツールをなすべきものである。」と、ノルウェーのヘルセツト中尉は繰返して説いてをる。

誰もエレベーターで大なる速力を出して下らうが、それに快感は感じまい。併し、スキーのジャンプにはこれがある。誰もエスカレーターに乗つて階下に下りたといつて痛快なりとはしまし。併し、スキーで斜面を滑る時にはそれが味ははれる。それは不安定さに打勝つがためである。子供等にとつては、滑り臺からの直滑降は冒険であつて、その成功は彼等を満足せしめるに違ひな

なかつた

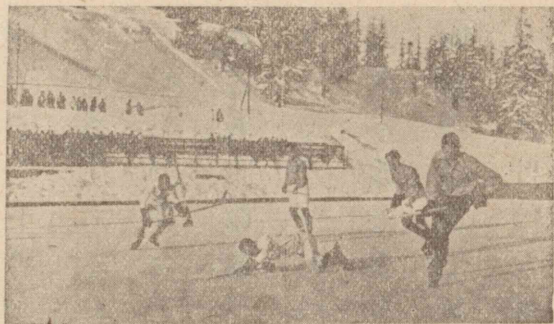
なからう



ジャンプ

いが、少し大きい少年には不満足である。彼等にはもはやそれは冒険でないからである。スキーは従つて、その不安定な半面に無上の快感が宿つてゐるのである。終日の疲労も一回の直滑降で癒されるのはこれがためである。轉倒することが全然なかつたならば、それこそスキーはつまらないものではなからうか。スキーは以上のやうに冬の自然を楽しむばかりではない。冬の自然を細かに観察させ、これに親しませ、多少なりとも雪と氷との知識を吾

スキーヤー
スキーをする
人



スキーホケ

吾に與へる。試に眞冬の高山の頂に立つて見る時は、その怪奇なる雪面の諸相に驚嘆するであらう。これらが風の方向または日射の方向、強弱によつて、刻々にその顔貌を變へることも、スキーヤーに驚異の眼をみはらせるに十分であらう。終りに競技のスキーについて一言を費しておきたい。スキーの競技は、ジャンプと長距離競走とであるが、興味を中心をなすものは何と云つてもジャンプである。實にジャンプ競技はスケートアイスホッケーと並ん

平衡

で、冬の競技の王位を占むべきものであらう。

ジャンプには、美大膽安定の三條件が要求されてゐる。四十米以上のジャンプになると、人間技でないと思へるくらいである。あの恐しい速力で、深く落ちてゆきながら、それでも少しも平衡を失はずに飛んでゆく姿を見て、私は人間の尊ぶべき存在であることに強く打たれたことが度々であつた。そのくらゐジャンプは吾々をして襟を正さしめるところがある。ジャンプは實にスキー競技中の花であるばかりでなく、あらゆる競技の中で、最も勇敢壯快なものである。

長距離競走は見物する點からいへば、餘り面白味のあるものではない。

が、山を越え、谷を渡り、雪野原を遠く横ぎつて、十五キロ乃至十八キロを走り通すことは、技術と忍耐力とを併せ有する者でなくては出来ない。まして耐久競走といつて、四十キロ乃至六十キロの競走に至つては猶更のことである。こゝに吾々は、鈍重ではあるが粘り強い北國人の性格を見るのである。

冬の世界は近づいた。炬燵の中から、部屋のガラス戸から觀賞する銀世界ではなく、吾々の突入し活躍する舞臺となるべき雪の世界が近づいた。青く澄んだ空と輝いた太陽との下で、雪と氷の上で、冬を楽しむ人々の上に幸あれ。

(東京朝日新聞に據る)

東龍太郎
醫學博士。東京
帝國大學教授。
大阪の人。明治
二十六年生。

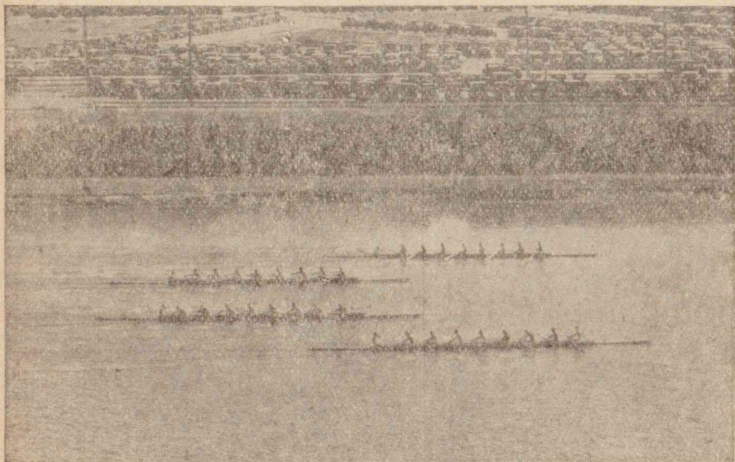
一七 スポーツと人生

東龍太郎

スポーツは單なる遊戯ではない。勿論争闘でもない。スポーツを閑人の時間つぶしや、見物人を喜ばせる興行物だと解する人があれば、それは映畫の劍劇を武道の極意と早合點するの愚に等しい。

スポーツは人をつくる。これが我等の信條である。「正しく」「強く」「明るく」「生きることを冀ふ人々には、一日も早くスポーツ道に悟入することをおすす、めする。スポーツ道といつても、これは決して淺薄な外來思想ではない。我等の誇とする日本武士道の傳統的精神と一體で

體得



ス - レ - ト - ボ

ある。たゞ武士道が武士の獨占物視されやすかつたのにひきかへ、スポーツは階級と年齢と境遇とを超越して、萬人の體得すべき、そして體得することの出来る道である點が、遙に現代の世相に適應してゐる。スポーツは誰もが求めて獲られる心身の糧である。

スポーツには卑怯未練な

ふるまひは嚴禁である。フェアプレーは即ち尋常の勝負である。しかし自分の非を隠して、他人のことを發あはいたり、甚しいのは自分の罪まで人に負はせて、一向恥かしいとは思はないやうな人間の多い今の世の中では、正しいスポーツの勃興と、スポーツ道の普及は、この上ない結構なことである。

スポーツマンは飽くまで謙讓でなくてはならない。「お山の大将おれ一人」といふ氣分は大禁物である。勝つて驕らず、負けて憂へずといふ心掛が肝要である。どこまでも謙讓の美德を發揮すると同時に、卑屈に陥つてはならない。

幡隨院長兵衛
本名は塚本伊太郎。江戸時代初期の俠客。明暦三年(一六五七)歿。
水鳥の羽音に云
平家物語卷五、
「富士川の事」の
條に出してある。

スポーツには度胸と闘志とが重要な要素である。度胸といへば、俎上の鯉と幡隨院長兵衛の姿が眼に浮ぶ。度胸は、要するに事に當つて、心の平靜を失はぬことである。水鳥の羽音に腰を抜かした平家の若武者の轍を踏まぬにある。本當の度胸は、自信から生ずる。自惚や驕慢と混同してはならない。

闘志は、負けじ魂や瘦我慢もその一面と見られる。腹がへつてもひもじうなく、武士は食はねど高楊枝である。露が、火の出るやうな闘志となるので、薄志弱行の徒に服用させたい薬である。

如實

悪戦苦闘、精根盡きて倒れたマラソン競走の國際選手が、「日本のためだ。しつかりせよ。」といふ激勵の言葉を耳にし、日章旗を眼にした瞬間、猛然と立ち上つて、決勝線に倒れこんだといふ物語は、超人間的な闘志のはたらきを如實に語るものである。勇猛な闘志があつて、始めて本當に人事を盡すことが出来る。

自我を没却す

殊に團體的なスポーツは常に自我を没却しなければならぬ。共同生活には、大なり小なり犠牲の覺悟がいる。全體の一部としての自己以外に出てはならない。

獅子身中の蟲

我利々々亡者、拔駟の功名争は、共同作業にとつて獅子身中の蟲となる。自己一身の利害の前には、社會國家を無

神髓

視するやうな輩が續出するとすれば、それはスポーツ道の精神いまだ天下に普くゆきわたらないためである。

スポーツに節度と規律はつきものである。精神の脱けたスポーツ、節度と規律のない競技は、我等の正しいスポーツの光を蔽ひ隠す暗雲である。

要するに、スポーツの神髓は、人をつくるにある。しかも、「正しく」「強く」「明るい」人をつくる。スポーツこそは、新興日本の要求する人をつくることが出来る。

競技をもつて、スポーツの全部と考へ、勝敗をスポーツの眼目とするのは、大きな誤である。スポーツ本來の使命は、「競技」ではなくて、むしろ「練習」そのものにある。即ち

胚胎

ウイリアムジエームス
十九世紀後半から二十世紀にかけての哲學者、心理學者(西紀一八二〇—一九〇〇)

喝破

人に勝つに先だつて、まづ己に克つことである。

「英國の力は英國民個人々々の品性の力に胚胎してゐる。そしてこの個人の品性は、英國民のすべての階級を通じて、スポーツに熱中するといふ國家的スポーツ崇拜ともいふべき觀念に培はれ、養はれて來たものである。」とアメリカの心理學者ウイリアムジエームスは喝破した。

我が國の過去において、あらゆる國家的活躍の奥には、常に武士道の傳統的精神が一脈連綿と續いてゐるのを見る。現在、我等の高調するスポーツ道は、まさに時代相に順應した武士道に外ならぬ。

一八 獨立

福澤諭吉

福澤諭吉
教育家。大分縣中津市の人。明治三十四年歿、年六十八。

節(擇)
人向の操

獨立とは先づ他人の厄介たるを免れ、一切萬事自分の身に引受けて、自分の力に衣食し、親子の間にてても其の分界を明らかにして、然る後に我が思ふ所を言ひ、我が思ふ所を行ふの義にして、其の基礎既に立つ上は、苟も本心に恥づる所を犯して、他に屈することを爲す可からず。大事に臨んで節を枉げざるは無論、一言一行の微に至るまでも、自分の氣に濟まぬことを等閑に附するは、獨立の旨に非ざるが故に、他に對して遠慮會釋はある可からず。世の中の人情に連れて餘儀なく云々、一時の方便の爲に

愧 ハズカシ

叶ふまじ

獨立の學

福澤諭吉筆蹟

止むを得ず云々とて、右す可きを左し、東す可きを西するが如きは、獨立の眞面目に非ずして、君子の愧づる所なり。斯く云へば、人間の行路は至極窮屈にして、色も艶もなく、到底打解けて人に交ふことも、思はるゝやうなれども、實際は決して然らず。抑、爰に云ふ獨立とは、之を外面に装うて、其の底に藏めて自ら守るまでの主義にして、其の心の寛大なるは、大海の物を容るゝに異ならず。

柳下惠 支那周代の人。
伯夷・叔齊 殷末の志士で兄弟。周の武王が殷を討たうとするのを諫めて容れられず、周の粟を食ふを恥ぢて首陽山に餓死した。

は人たり、我は我たり、苟も人の來りて直ちに我が獨立を妨げ、また之を妨げんことを試みるに非ざれば、悠悠として交ふこと甚だ易し。或は此の旨を評すれば、人に接するの法を柳下惠にして、自ら守るの心を伯夷・叔齊にすと云ふも可なり。一片の獨立は生命より重し。之を妨げんとする者あらば、滿天下の人も敵に取る可し、親友の交も絶つ可し、骨肉の情も去る可し。斷じて躊躇せざる所なれども、さて實際に於ては決して斯かる劇しき場合はなきものなり。

譬へば封建の時代に、武士が雙刀を帶したるは、天下の人を敵にして、無禮者はたれかれの容赦なく切つて棄て

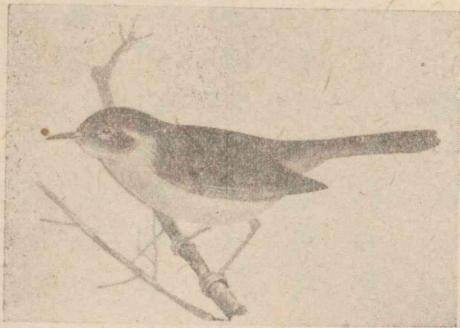
んとの覺悟なりしかども、苟も仁義を重んじて武士道を
 守る限りは、柄に手を掛くるの必要なくして、何十萬の武
 士が何百年の日月を無事に經過したるが如し。當時の
 天下に鄙劣なる者も多く、臆病なる者も多しと雖も、其の
 者が武士に向つて無禮せざる間は、之を許し、相互に往來
 して、曾て自由の交際を妨げず。唯眞實の武士は自ら武
 士として、獨り自ら武士道を守るのみ。故に今の獨立の
 士人も、其の獨立の法を昔年の武士の如くにして大なる
 過なかる可し。

(福澤翁百話)

一九 鶯が鳴く

萩原井泉水

萩原井泉水
 名は藤吉、俳人。
 東京市の人。明
 治十七年生。



鶯は春を告げる鳥といはれてゐる。春に魁して鳴く
 からである。さうして、春が老いて
 ゆくと共に彼と彼の聲も亦老いて
 ゆく。彼は春の爲に生きてゐるや
 うで、それ故に、短い春の間をせい一
 ぱいに鳴きあげて、その青春をたの
 しんでゐるのだ。彼の聲は實に朗
 らかだ。フオウと笛を吹くやうに、
 息を出し初めて、舌を口を如何にも自由に操つてゆく。

餘韻

高らかで、晴やかで、張があつて、引があつて、抑揚に富んで餘韻をもつてゐる。麗かき、彼の聲は全く春の麗かさである。

鶯の聲は朝早く聞くのがいゝ。木の梢が、枝が、家の屋根が、軒が、だんくくと朝の日に染つてゆくころ、ホツとほとぼしり出るといふ感じに鳴く。彼の聲は朝の光のリズムだといつてもいゝ。清少納言は鶯が夜鳴かない事を非難してゐるけれども、それは間違つてゐる。鶯の聲はどうしても朝の聲であり、光の聲として宜しいのだ。外國のナイチンゲールを「鶯」と譯したりもするが、それは夜鳴くものだといふ事だから、鶯とは全く感じの違ふ

清少納言
清原元輔の女。
一條天皇の皇后
に仕ふ。生歿年
未詳。

鳥と思はれる。

畫家が鶯の畫をかくの、杓子を二つに割つた形と思つてかくと、案外たやすく鶯の形が出るといふ祕傳を聞いた事がある。だが、私は鶯餅といつて賣つてゐる、後先のすつと細いだけの餅菓子にも、案外好く鶯の感じが出てゐるのををかしく思ふ。もつとも、鶯餅にまぶしてある青きなこに、鶯の羽の色を思はせる譯だが——春の始めに土から萌え出る草のやうな、黄味を帯びた青さほど、鮮やかで、又、美しいものは少い。「鶯餅あります」——場末の菓子屋の硝子戸にこんな紙が貼り出されてゐたりするの、やはり春の始めであつてこそふさはしいのである。

る。

鶯は群を好むものではない。彼は一つ、もしくは二つ位で遊んでゐる。彼は騒がしくはない、しかも決して淋しいといふ感じはない。彼は山の深い所でも鳴く、又人里に來ても鳴く。彼は隱逸を好むやうに見える。しかも必ずしも厭^{ヲミ}人的ではない。彼は人里に出るべき時には出て來るし、山に隱れるべき時には隱れる。彼はよく季節を知る事、つばくろの通りであるが、彼はつばくろのやうに旅が好きではない。自分の産れた處にいつまでも愛着をもつてゐて、それで楽しいといふ氣持である。詩人や、歌人にもかういふ人がゐる。いつも自分の身邊

隱逸

の事だけを詠つて、それでゐて、少しも行きづまるといふ事がない。これは一つの朗らかな境地だといつてよらしい。

鶯のあちこちとするや小家がち

人里に來てゐる鶯だ。あちこちするのはあわたゞしいのではない。彼は春の光の中に逍遙してゐるのだ。その小家はまばらであり、家の後ろには茶畑などあり、どの家でも、その鶯を自分の家に來た鶯だと思つてゐる。

うぐひすや家内揃うて飯時分

障子に朝の日がさしてゐる、膳の上にはおかずといふ程のものもないが、温かさうな飯がゆげを立ててゐる。

揃うて

田へ出るべきもの、山へ行くべきもの、物を習ひに行く
子供もあらうといふものだ。

鶯の鳴くや小さき口あけて
その小さな口が大うつしにうつしとられてゐる。そ
れ程、目の前近いところで鳴いてゐる。それ程人氣がな
いかと思ふ程の静さである。それで、その聲を立てる様
がはつきり描かれてゐると共に、その聲も亦、鮮やかにひ
びきわたるやうである。

鶯の聲遠き日も暮れにけり

遠くして聞いてゐる鶯もいゝものである。いや、聞いて
ゐるのではない。だが聞いてゐないのである。鳴

行かす。

くから聞える、聞えるから聞く。ひつきりなしに鳴くの
ではない。又杜絶えてゐるのでもない。時鳥の聲を聞
かうといつた風に、待構へて聞くものにはぎやうくし
さがあり過ぎる。たゞかうした自然なのがいゝ。雲雀
の聲のやうに、夕日の落ちるのを如何にも惜しさうに囀
られるのも氣ぜはしすぎる。たゞかうして静に暮れて
行く日を暮れて行かすといふ心持がいゝ。

鶯を雀かと思しそれも春

もしこれが、雀を鶯かと思つて見たのであるならば—
—春だから鶯が來さうなものと思つてゐたものだから、
雀も鶯に見えたといふのであるならば—それは風雅

月並

病にとりつかれてゐる風雅人の幻覺であつて、それを私達は月並と名づける。これはほんたうの鶯を雀かしらと見た、そこに實に自然に、その庭先にまで來てゐるところの「春」がある。

私がいま鶯を聞きながら想ひ起すのはこれらの蕪村の句である。蕪村には春の句に佳作が多い。蕪村は春の詩人といつてもいい。そのうちでも鶯の句に、私の好きな蕪村が微笑んでゐるのである。

(春秋草紙)

蕪村
五九頁頭註參照

二〇 折にふれて

島崎藤村

誠 實

すべてのものは過ぎ去りつゝある。その中であつて多少なりとも「まこと」を残すものはほんたうな残すものこそ、真に過ぎ去るものと言ふべきである。

先づ身を起せ

心を起さうと思はば、先づ身を起せ。

單純な心

吾等は常に單純な心を持ちたい。そして複雑なこの世を味はひ知りたと思ふ。

島崎藤村
名は春樹。詩人。
小説家。長野縣
人。明治五年
生。

心を云々
獨逸の哲學者ニ
イチエの言葉。

涙と汗

涙は悲哀を癒し、汗は煩悶を和らげる。涙は人生の慰
藉である。汗は人生の報酬である。

先づ自己に力を得よ

外界のことを思ひ煩ふ勿れ。先づ自己に力を得よ。
さすれば外界のことは自然と解決がついて行く。

専門

人は専門家たるべく生れて来たものではない。専門
を定めるといふことは、多くの場合に衣食を得るの必要
から起る。

時

ある人の言葉に、「時過ぎ行くにあらざるなり、吾等過ぎ
ゆくなり。」とあつた。この言葉は忘れがたい。

一日

ユーモアの無い一日は、極めて寂しい一日である。

美を積むもの

心貧しきが故に善を積む。愚なるが故に善を積む。
悲しみ深きが故に善を積む。さう言つて善を積まうと
した人達もあつた。
美を積むものの心もこれに劣るまい。

(藤村少年讀本)

ユーモア
上品な滑稽。

美を積む
善を積む
美を積む
善を積む
美を積む
善を積む

高山樗牛
 名は林次郎。文學博士。文藝批評家。山形縣の人。明治三十五年歿年三十二。
 熱海
 静岡縣田方郡の溫泉地。避暑・避寒に適し、風光に富む。

二 我が袖の記

高山 樗牛

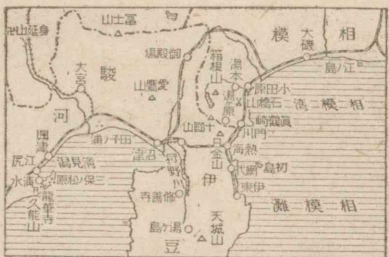
一 熱海の冬

熱海のふた月は、まことに楽しきあはれ深き冬の暮しなりき。よそならば吹雪にとちられて、日影も薄き冬の眞中も、名にし負ふ暖地なれば、こちふく風も寒からず。むつきはじめの梅が香は、はやくも春を告げそめて、野邊のやけあとの緑なすは、人の心もときめくころか。苦屋どもに岩海苔のかをりせるもをかしく、蘆の屋に心細く立ちのぼる煙ものどかなりや。

海原遠く見渡せば、相模・安房の山々、雲か霞の、すがたおもしろく、大島が根に立つ煙の、春風にたなびけるに、水や

大島
 相模灣の南。伊豆列島の一。

沖の小島
 「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や、沖の小島に波のよる見ゆ。」
 (源實朝、金槐集)
 魚見が崎
 熱海市の南端の岬。
 日金・十國
 伊豆國(静岡縣)田方郡に在る山。



空とも分ちかねたり。沖の小島と誰がよみたりし。初島わたり、漕ぐふなうたの、寄る浪ごとに聞ゆるもゆかしく、魚見が崎のこなたより渚をつたうて、砂白く松青きほとり、濱千鳥の群れ飛ぶさまもいとをかしや。後ろには日金・十國の山々を負ひて、前には天空海闊の間に、一灣の春を擁する豆南の風光は、筆にはなかくに及びがたし。

二三 保の春

彌生のはじめ、われ熱海を去りて、清見が關の古跡をとひぬ。

三保の松原
駿河灣に突出し
た砂洲。

田子の浦
富士川口の海
岸。

江尻
清水港の西岸。

清水
(清水市)。江尻
町と相望む天然
の良港。

龍華寺
駿河國(靜岡縣)
阿倍郡不二見村
に在る日蓮宗の
寺。



三保の松原

松風遠く吹き合せて、波の音
もかすかなる、物思ひまさる夕
なりき。われひとり宿を立出
でて三保の松原に遊ぶ。入日
の影は雲にのみ残りて月未だ
上らず、田子の浦曲の夕風に、千
鳥の聲もいと稀なり。江尻、清
水をはや過ぎて龍華寺の輪塔
を右手に見つ。袂に寒き山嵐
に、入相の鐘を吹き送りて、初春
のあはれ一入深し。三保に辿

清見瀉
今興津町の南。
清水港の古名。

杳一杳

石ぶみ

り着ける頃は、月漸く上り、清見瀉の水煙は闇路遙に立て
こめて、富士の高嶺に雪の色白し。見渡せば一帯の松林、
木ぶかく生ひ繁るかな。木立の篩へる月の明りに、残ん
の雪の色冴えて、杜の下道杳なる、霞に落つる影もなし。
波の音漸く近くして、我は羽衣の松に添うてたちぬ。
羽衣の松はわが年久しく思ひこがれしものなりき。
よしさらば、今宵は月と共に立ちあかさむかな。
松は早く枯れて、幹の朽ちたるが残れり。そのもとに
ゆかりを誌せる石ぶみありしが、月の光おぼろにして今
は見えわかず。あはれ、波の音と松風とのみぞ、今も昔に
かはらざりける。

(我が袖の配)

伊藤左千夫
名は幸次郎。歌
人。千葉縣の人。
大正二年歿。年
五十。

沼津

静岡縣駿東郡の
市。舊東海道五
十三次の一驛。

昔の東海道
徳川時代の江戸
から京都に至る
街道。

子持川

千本松原と沼津
市街地との間を
流れる。

千本松原

沼津市に屬し、
駿河灣に臨む海
濱の總稱。今公
園。

三 千本松原

伊藤左千夫

沼津の町の細い横丁を二曲り三曲りして、昔の東海道へ出た。右へ少し行つて町を出てしまふと、小さな川がある。子持川とかいふさうだ。此の川の縁を行くと、千本松原はすぐ眼の前に横たはつてゐる。幾萬本あるか分らぬ程の松が背くらべをして、雲を突いてゐる。天氣が曇つてきて雨模様であるから、松の梢が雲に届いて居るやうだ。

松原の中へ這入つてみると、外から見たよりも一層立派な松原である。三かゝへもある古木が背を相競うて

十丈以上に高く立つて居る。其の壯快な趣は何とも形容が出来ない。根上りの松も、庭の植木や盆栽の不自然なのは極めて厭味なものであるが、此處では風が砂を吹きさらつて、自然に根上りとなつて居るので頗る趣がある。巨大な幹や、繁り繁つた枝や葉をしつかりと支へて居る根張りの力が、十分其の形に顯れて居る。實に見る眼も氣持がよい。此の高大な壯快な趣は到底舞子などの及ぶところではない。

松原を出ると、芝原に空屋らしい家が一軒ある。其の前を通つて波打際へ降りて見ると、海は極めて穏やかで伊豆の眞城山・大瀬崎など手に取るやうに見える。西の

舞子

兵庫縣垂水町の
海岸、東は須磨、
西は明石の浦に
つゞいて、昔か
ら風光明媚の所
として知られて
ゐる。

眞城山・大瀬崎
静岡縣田方郡に
在る。

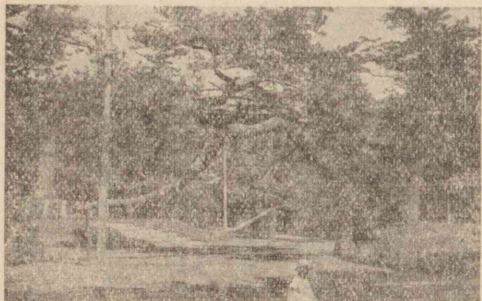
久能山・三保
静岡縣安倍郡に
在る。

鈴川
静岡縣富士郡元
吉原村に在る舊
宿場。

方、久能山・三保など薄黒い雲のやうである。のたり／＼と波が寄せる。潮水は透明で、底の砂利が美しく見える。予は白い小石を拾ひ、赤い小石を拾ひ、青い小石を拾ふ。白いのが最も美しい。水中に在るのが殊に美しく見えるので、波の引いた處へつけ入つて取らうとする。復、波がすぐ寄せて来る。波が引く、取らうとする。復、波がすぐ寄せ返す。たうとう片足の足袋を濡したが、小石は取れなかつた。波が石を惜しむやうに感じた。三十間許りの沖を、鵜が三羽かづいては泳ぎ、かづいては泳ぎ、東の方へ泳ぎ行く。鈴川の邊から小舟が二艘、ゆた／＼と櫓を押しして来る。のたり／＼の波とよく調和して居る。

六代松

平維盛の長子六代が、平氏滅亡の後此の地にて將に刑せられようとした時、鎌倉から赦免の使者が到着して刑を免れた遺跡。



六代松遺蹟附近

煙のやうな風が吹いて、天氣が一層ぼんやりとして来た。予は六代松を見る心組であるから、此の邊から上つたらよからうと氣づいて、松原に向つて上つた。松原を通り抜けて里へ出る道がついて居る。其の路端の松の中に荷車を置いて、づんぐりとした親爺が、砂利を磯から荷車へ運んで居る。予が其の親爺に六代松の所在を尋ねると、親爺は先づ鉢巻の手拭を外し、姿勢を正して答へた。

「はい、六代松でございますか。私は此の村の者ではあ

りませんが、人様に尋ねられてもと思ひまして聞いて置きました。六代松と申しても松はありません。あそこに墓場があります。向うの垣根と其の墓場との間を右へ曲ると、小さい森が見えます。其の森の中にしろし標の石が立つて居ります。はい。」

予は其の篤實なるに深く心を動かしたのである。

なる程、六代松といふ松は無い。常磐木の小さなこんもりとした森の中に、さゝやかな石が立つて居た。非常に大きな松があつたとの事だが、今は其の根株の跡も判らぬ。幾百の生首を一まとめにして埋めた事跡とは反對で、危き命が助つた人の喜び、其の従者どもの喜び、助け

助つた人

六代

従者ども

齋藤五、齋藤六。

助けた人

文覺上人。

北條主従
北條時政主従。

た人は勿論、守護の任に當つた北條主従に至るまで嬉し涙にくれた様、眼の前に見える心持がするのである。

予は松原の中を縦に通つて居る道を歸つて来る。女子供の松葉を搔いて居るのが幾組もある。道理で松原は塵もとめぬほどに掃除されてゐる。

此の松原について大いなる愉快を禁じ得ぬ事があつた。それは十餘町も往復する間に、松葉搔に幾組も出逢つて、此の地方の者が松原で焚きつけを求めることが知れたに拘らず、篠一本、小松一本、刃物を以て切つた痕を見なかつた事である。予はかく心づいてから、餘程注意して見たが、遂に切り取つた痕も、折り取つた跡も認め得な

静浦
千本松原より東
南、伊豆に近い
海濱。

かつた。如何にも篤實な人氣の地であるといふことが
明らかに察せられる。此の立派な松原が少しも損はれ
ずに今日に傳はつたのも、決して偶然では無い。官林の
事であるから、妄に竹木を切つてはならぬとなつて居る
には相違ないが、人氣が篤實でなくて、どうしてそれが行
はれよう。何の辨へもない兒童に至るまで、少しも其の
禁を犯さぬといふのは、理窟の力でなくて、民衆の美質に
由ることは疑ふ餘地もない。始めて沼津に来て、何とは
なしに平和の趣を感じた予は、今それを知識的に觀察し
得たのである。富士の眺も美しい、静浦の眺も美しい、千
本松原も美しい、併しながら沼津の人氣の篤實な、眼に見

えない美しさにはとても及ばないであらう。

予は此のやうな事を考へながら急いで歸つて來ると、
雨がぼつ／＼落ちて來た。予が松原を出ようとする
松林の小高いところに十二三の男の兒が三人遊んで
る。其處に居た犬が予を見て俄に吠えだし、予に向つて
走つて來る。男の兒は頻りと犬を叱る様子であつたが、
予は犬の吠えるのには眼もくれないで出て來る。犬は
益々吠える。やがて男の兒は走つて來て、犬を捕へて吠え
させない。予は茲にも一點の美を認めて、もと來た子持
川の脇へと出た。見渡した沼津の宿は、ほんのり霞をこ
めて春雨が靜に降つて居るらしい。

(左千夫全集に據る)

吠え。

貝原益軒

名は篤信、儒者。
筑前國(福岡縣)
の人。正徳四年
(一七三〇)歿、年八
十五。

日新

「湯之盤銘曰、苟
日新日々新又日
新」
(天 學)

二三 日新の工夫

貝原 益軒

心學に志す人は日新の工夫を用ふべし。日に新たに
すとは、昨日の舊き悪を改めて今日は新しく善に移り、今
日は昨日にまさりて新しくなるを、日に新たにすといふ。
かくの如くなれば、今日は是にして昨日は非なることを
覺ゆべし。かやうにつとめて止まざれば、日々に工夫進
み、月には異にして、年には同じからず。一日には一日の
功あり、一月には三十日の功あり、一年には三百六十日の
功あり、三年には千日の功ありて、徳に進み善に移りゆか
ば、その樂しみ極りなくして、手の舞ひ足の踏むことを知

らざるべし。かくのごとく進み行かば、君子となること
必ず期すべし。若し今日は昨日に變らず、今月は前月に
異らず、今年は去年に同じくば、日に新たにする力なくし
て、いつまでも愚者にて世を終へむこと口惜し。

疑ひを人に問ふは智を求むる道なり。自ら心に道理
を思ふは智を開く本なり。問ふは智を人に求むるなり。
思ふは智を我に求むるなり。人に問はざれば知ること
狭くして心に迷ひ解けず。自ら思はざれば見聞くこと
廣しといへども、道を我が心に深く自得せず。

この故に問ふと思ふとの二つは、理を窮め智を明らか

にする道にして、學の要なり。

凡そ勤めに退屈し、久しく勤め難きは、大方は精力の弱きにはあらず、氣隨にして事を勤むるを嫌ひ、心忙しくて短き故、むつかしく思ひて早く退屈するものなり。心靜にして事を嫌はず、次第に隨ひて一つづつ漸くに勤むれば、久しく勤めても疲れず、怠りなく撓みなければ、靜にしてもはか行くものなり。

昔二人同じ船に乗りて行くに、一人は性急なり、日和悪しく船の遲きを苦しみて、晝夜心を惱まし形かじけたり。

一人は性穩やかなり、船の遲きを苦しまず、よく食し安く寝て、顔色うるはし。その處に着きしかば二人一時に陸に上る。この間船遲しとて心を苦しめし者何の益あるや。唯自ら苦しめるのみ。これ心短き人の戒とすべし。天下の事、我が力に爲し難きことは唯天に任せ置くべし。心を苦しむるは愚なり。

(益軒十訓)

二四 夜又王

岡本綺堂

登場人物

面作師 夜又王

源左金吾頼家(二十三歳)

夜又王娘 桂

下田五郎景安(十七八歳)

同 楓

修禪寺の僧

元久元年七月十八日

伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜又王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素焼の土瓶など掛けたり。庭の入口に竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其の後は畑を隔てて塔の峯つゞきの山又は丘など見ゆ。

岡本綺堂
名は敬二。劇作家。東京市の人。昭和十四年歿、年六十八。

頼家

源頼朝の子。元久元年(六四)歿、年二十三。

修禪寺

一名桂谷山寺。眞言宗。

二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾がましだれを下せり。庭前には秋草の花咲きたり。楓門に立ちて人を見送る體。そこに修善寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿、後より下田五郎景安頼家の太刀を捧げて出づ。

僧 これく、將軍家の御微行おしゆびぢや、疎忽があつてはなりませんぞ。

楓、はつと平伏す。頼家主從進み入る。夜又王出で迎へて、

夜又 思ひも寄らぬお成とて、何の設もござりませんが、先づあれへお通り下されませ。

頼家は縁に腰打掛く。

夜又 して御用の趣は。

頼家 問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に残さんと、曩に其の方を召出し、頼家に似せたる面おもてを作れと、繪姿までも遣しておいたるに、日を経れども出来しあつたせず、幾度か延引を申し立てて、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎 多寡が面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも百日とは費すまい。お細工仰せ付けられしは當春の初、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ献上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上様の御機嫌散散ぢやぞ。

頼家 予は生れ付いての性急ぢや。何時まで待てど暮せど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣すこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ。仔細を申せ。
夜又 御立腹恐入りました。ござりまする。勿體なくも、征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のもの一箇も無く、更に打替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

頼家え、催促の都度に同じ事を――。其の申し譯は聞き飽いたぞ。

五郎 此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫びを申せ。

夜又 其の期日は申し上げられません。左に鑿を持ち右に槌を持ってば、面は容易く成るものと思召すか。家を作り塔を組む番匠などとは事變りて、これは、生無き粗木あきを削り、男女、天人、夜又、羅刹、ありとあらゆる善惡、邪正の魂魄を打込む面作師。五體にみなぎる精力が兩腕に自らあつまる時、我が魂魄は流るゝごとく彼に

番匠

通ひて始めて面も作れます。たゞし、其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、われながら確とわかりませぬ。

僧 これ、夜又王殿。上様御自身も仰せらるゝ如く至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止めの無い事申し上げたら、御疝癰が愈、募らう程に、こなたも職人冥利、いつの頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからうぞ。夜又ぢやというても出來ぬものはなう。

僧 何の、こなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜又王といへば、京鎌倉までも聞え

三島神社
官幣大社、伊豆
國(静岡縣)田方
郡三島町に在
る。

た者ぢやに――。

夜叉 さあ、それ故に出来ぬといふのぢや。わしも伊豆の
夜叉王といへば、人にも少しは知られた者。たとへお
咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に残すのは、
如何にも無念ぢや。

頼家 何、無念ぢやと――。さらば如何なる祟を受けうと
も早急には出来ぬといふか。

夜叉 恐れながら早急には――。

頼家 むゝ、おのれ覺悟せい。

疍癖募りし頼家は、五郎の捧げた太刀引取つてあはや抜かんとす。
奥より桂走り出で、

受けう

桂 まあ、お待ち下さりませ。

頼家 えゝ、退け。

桂 先づお鎮り下さりませ。面は唯今献上いたします
る。なう父様。

と顧みれども、夜叉王は黙して答へず。

五郎 何、面は既に出来して居るか。

頼家 えゝ、おのれ前後不揃のことを申し立てて、予をあざ
むかうでな。

桂 いえ、嘘偽ではござりませぬ。面は確に出来し
て居ります。これ父様、もう此の上は是非がござん
すまい。

楓 ほんに然うぢや。昨夜漸く出来したといふ彼の面
を、寧そ献上なされては――。

僧 それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も
惜しからうが、命も惜しからう。出来した面があるな
らば、早う上様に差上げて、御慈悲を願ふが上分別ぢや
ぞ。

夜又 命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事では
ない。黙つておるやれ。

僧 さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面
を持つて来て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早
う早う。

ゐられう

楓 あい〜。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂受取
りて頼家の前に捧ぐ。頼家、無言にて少しく解けたる體なり。

桂 嘘偽ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家、假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲をあげて、

頼家 おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎 上様お顔に生き寫しぢや。

頼家 む〜。

と飽かず打ちまもる。僧はしたり顔に、

僧 さればこそいはぬ事か。それ程の物が出来してゐ
ながら、とかう澁つて居られたは、夜又王殿も氣の知れ

ぬ男ぢや。 ははゝゝゝ。

夜又王、容を改めて、

夜又 何分にも我が心に適はぬ細工。 人には見せじと存
じましたが、かう相成つては致し方もござりませぬ。

方々には其の面を何と御覽なされます。

頼家 さすがは夜又王、天晴のものぢや。 頼家も満足した
ぞ。

夜又 天晴との御賞美は、憚りながらお鑑識違ひ。 それは
夜又王が一生の不出來。 よう御覽じませ。 面は死ん
で居りまする。

五郎 面が死んで居るとは――。

夜又 年來數多打つたる面は生けるが如しと人もいひ、我
も許して居りましたが、不思議や、此の度の面に限つて、
幾度打直しても生きてる色なく、魂魄も無き死人の相
――。 それは世にある人の面ではござりません。 死
人の面でござりまする。

五郎 そちはさやうに申しても、我等の眼には矢張り生き
たる人の面――。 死人の相とは相見えぬがなう。

夜又 いや、どう見直しても生ある人ではござりませ
ぬ。 しかも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き、怨靈怪
異なんどのたぐひ――。

僧 あ、これ、其のやうな不吉の事は申さぬものぢや。

御意に適へば、それで重疊。有難くお禮を申されい。
頼家むゝ、とにもかくにも此の面は頼家の意に適うた。
持ち歸るぞ。

夜又 たつて御所望とござりますれば――。

頼家 おゝ所望ぢや。それ。

類にて示せば、桂は心得て假面を箱に納む。頼家立つ。五郎も立つ。
桂箱を捧げて庭におり立つ。

僧 やれ、これ、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜又王
殿、明日又逢ひませうぞ。

頼家 行きかゝりて物に躓く。

頼家 おゝ、何時の間にか暗うなつた。

僧 進み出でて桂に雪洞を渡す。桂、假面の箱を僧に渡し、雪洞を持つて案内す。夜又王はじつと思案の體なり。

楓 父様、お見送りを――。

夜又王、始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎 そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。

頼家等、相前後して出で行く。夜又王、起ち上つて霎時^{しばし}黙然として沈思しゐたりしが、やがてつかく、と縁に上り、細工場より槌を持ち來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下げ、あはや打碎かんとす。楓は驚き取籠りて、

楓 あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜又 切羽詰りて是非に及ばず、拙き細工を献上したは、悔

所詮

んでもかへらぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜又王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑を貽さば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜又王の名は廢つた。職人も今日限り、再び槌は持つまいぞ。

楓 さりとは短氣でござりませう。如何なる名人上手でも、細工の出来不出来は時の運。一生の中に一度でも天晴名作が出来ようならば、それが即ち名人ではござりませんか。

夜又 む。

楓 拙い細工を世に出したが、さ程無念と思召さば、これ

から、愈、精出して、世をも人も駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

と縋りて泣く。夜又王答へず、思案の眼を瞑ちたり。

(修禪寺物語)

二五 哲人聖德皇太子

高島 米峰

高島米峰
名は大圓。思想家。新潟縣の人。明治八年生。

憲法十七條
推古天皇十二年
(二云)四月に定められた。

私の最も崇敬する偉大な哲人を過去に求めて私はまづ聖德太子を挙げざるを得ない。聖德太子の偉徳、鴻業は山の如く高く、海の如く廣く、到底筆紙のよく盡すところでない。憲法十七條を定めて平和の理想を宣言し、こ

冠位十二階
推古天皇の十一年(二云)十二月に定められた。

弊一幣

の理想實現の爲には、佛教の信仰を以て國民の精神生活の根本基調とすることの切要なるを認め、更にこれに依つて、天皇中心主義を闡明して、建國の精神を振作し、又冠位十二階を定めて人材登用の門を開き、以て閥族跳梁の弊を一掃して、内政を充實し給うたので、日本の面目はここに全く一變するに至つたのである。嘗にそればかりでなく、當時世界の最大強國として、最も文化の進化した支那——支那は恐らく日本をその屬國くらゐにししか考へてゐなかつたであらうほど、それほど日本の世界的地位は低いものであつた。——と對等の國交を結ぶことになつたといふのは、實に聖德太子の偉大な功業である。

推古天皇
第三十三代

聖德太子は推古天皇の十五年に遣隋使發遣のことを決定し給ひ、小野妹子が使節に任せられて、その年七月に出發した。この年は隋の煬帝の大業三年で、妹子が煬帝に差出した國書の冒頭には、

「日出づる所の天子、書を日没する所の天子に致す。恙なしや。」

とあつて、實に堂々たるものであつた。從來支那はみづから中國を以て任じ、東夷・西戎・南蠻・北狄と四方の國々を野蠻國扱にしてゐたので、日本の如きも所謂東夷の中の一つくらゐに考へてゐたのであらうが、その日本から、突如としてかうした對等な禮を以て書を贈つたので、煬

帝は甚だ不快に感じ、一度はこれを却けたのである。が、しかし是程の國書を差出す國は、一體どのくらゐな文化をもち、國民の生活がどのくらゐ進んでゐるか、ともかくもその實情を知る必要があると思つたのであらう、斐世清といふものを使者として我が國に遣すこととなり、斐世清は小野妹子と共に、翌年四月難波に着いたのである。この隋使斐世清の報告が、日本を隋と對等なものにするか、それとも依然として屬國扱にするかといふ最も重要なものであつたので、聖德太子はその待遇については、頗る心をお籠めになつたらしい。まづ朝廷では飾船三十艘を以て一行を難波の江口に迎へさせ、難波の新館をそ

難波
大阪の古稱。

江口
大阪府淀川の河口。

海石榴市
奈良縣磯城郡。
今三輪村大字金
屋の内。
衢一巷

の旅館に充てて、優遇到らざるなく、また彼が都に入る時には、飾騎七十五疋を以てこれを大和の海石榴市の衢に迎へ、天皇の謁を賜ふ時には、有司百官が定められた冠位に随つて、綺羅星の如く宮廷に居並んだといふので、さすがの斐世清も、すつかり感服してしまつたらしい。その結果、彼が歸國の時、第二回遣隋使として再び小野妹子を遣すこととなり、その時妹子の持つて行つた國書は、これもやはり聖德太子の筆に成つたもので、實に大文章であつた。さすがの隋の煬帝も斐世清の報告やら、かうした堂々たる二度の國書やらでも、もう否應なしに、對等な國交を結ばなければならぬことになつて、支那は日本を完

全な獨立國として認めなければならなくなつたのである。これ實に聖德太子の理想の一面が遺憾なく實現したのであつて、我が國が金甌無缺な國體を維持して今日に至り、更にその天壤と共に窮りなきを期し得られるのも、これ等に淵源するところが頗る多いのである。

聖德太子の御事業は、右に述べた外、外國文明の輸入でも、美術工藝の奨励でも、歴史の編纂でも、憲法の創制でも、冠位の制定でも、曆法の研究でも、何一つとして偉大でないものはないが、その中でも最も重要なものは即ち天皇中心主義の徹底、最も意義あるものは即ち佛教の興隆、最も花やかなものは即ち日隋對等な國交であつて、これ私

底—低—抵—概

が哲人として崇敬し讚歎し奉る所以なのである。

惟ふに日本開闢以來、皇太子で攝政の大任を帯びさせられた方は、僅に御三方しかましまさぬ。しかもその中の御二方が、皆二十代の青年で、この大任を帯び給うたといふことは、現代學生の最も尊い龜鑑でなくてはならない。その所謂攝政皇太子の御三方と申し上げるのは、推古天皇の攝政皇太子聖德太子、齊明天皇の攝政皇太子中大兄皇子、及び今上陛下即ち前の攝政皇太子裕仁親王殿下にましまし、聖德太子は二十歳、中大兄皇子(後の天智天皇)は三十歳の時に、そして私たちの敬愛し奉る前の皇太子殿下は二十一歳の時に攝政の大任を帯びさせられる

齊明天皇
第三十七代。
中大兄皇子
舒明天皇の皇
子。

こととなつたのである。聖德太子攝政の時代にも、中大兄皇子攝政の時代にも、日本が内に充實し外に躍進したといふ事實から考へ合せて、どうしても昭和の日本もまた、我が聰明英邁にわたらせられる今上陛下の御威徳によつて、更に一段と内に國力を充實し外に國光を發揚すへきことを確信せざるを得ないのである。

新制國語讀本 卷四 終

體	サ	カ	下	下	上	上	ナ	四	ラ
言	變	變	一段	二段	一段	二段	變	段	變
花	爲	來	蹴	受	着	起	死	讀	有
	り								する
									さる さす
									まほし まじざり ずまし むしむ
花	爲	來	蹴	受	着	起	死	讀	有
	り								きけん
									たし たり かはつ かぬ ナ はつ に
花	爲	來	蹴	受	着	起	死	讀	有
									べし べから らむ らし めり まじ なり (詠歎)
花	爲	來	蹴	受	着	起	死	讀	有
									まめらべ らむから まじりし
									なり (指定) 如し
	爲	來	蹴	受	着	起	死	讀	有
	る	る	れ	くれ	れ	くれ	ぬれ	め	れ
									り

文語助動詞連續法

體	サ	カ	下	下	上	上	ナ	四	ラ
言	變	變	一段	二段	一段	二段	變	段	變
花	爲	來	蹴	受	着	起	死	讀	有
	り								する
									さる さす
									まほし まじざり ずまし むしむ
花	爲	來	蹴	受	着	起	死	讀	有
	り								きけん
									たし たり かはつ かぬ ナ はつ に
花	爲	來	蹴	受	着	起	死	讀	有
									べし べから らむ らし めり まじ なり (詠歎)
花	爲	來	蹴	受	着	起	死	讀	有
									まめらべ らむから まじりし
									なり (指定) 如し
	爲	來	蹴	受	着	起	死	讀	有
	る	る	れ	くれ	れ	くれ	ぬれ	め	れ
									り

花 促音便 持ちて一つ 知りて一つ

動詞活用對照表

＊蹴ルハ八國語ニテハ四段ニモ活用ス

口語		文語	
種類	活形	種類	活形
四段活用 (カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ラ行)	書カ 死ナ 有ラ 起キ 着キ 得エ 蹴ケ 來コ 爲シ	四段活用 (カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ラ行)	書カ 死ナ 有ラ 起キ 着キ 得エ 蹴ケ 來コ 爲シ
上一段活用 (カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ラ行)	起キ 着キ 得エ 蹴ケ 來コ 爲シ	上一段活用 (カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ラ行)	起キ 着キ 得エ 蹴ケ 來コ 爲シ
下一段活用 (ハ・マ・ヤ・ラ・ウ行)	蹴ケ 來コ 爲シ	下一段活用 (ハ・マ・ヤ・ラ・ウ行)	蹴ケ 來コ 爲シ
カ行變格	來コ 爲シ	カ行變格	來コ 爲シ
サ行變格	爲シ	サ行變格	爲シ
種類	未然 連用 終止 連體 假定 命令	種類	未然 連用 終止 連體 假定 命令
活形	シセ シキ スル スル スレ シセヨ	活形	シセ シキ スル スル スレ シセヨ

形容詞活用對照表

口語		文語	
種類	活形	種類	活形
ク活用	クク	ク活用	クク
シク活用	シク	シク活用	シク
種類	未然 連用 終止 連體 假定 命令	種類	未然 連用 終止 連體 假定 命令
活形	シク シイ シイ シケレ	活形	シク シイ シイ シケレ

助動詞活用對照表

口語		文語	
種類	活形	種類	活形
受身	ラレ	受身	ラル
可能	ラレ	可能	ラル
使役	サセ	使役	サス
尊敬	ラレ	尊敬	サス
種類	未然 連用 終止 連體 假定 命令	種類	未然 連用 終止 連體 已然 命令
活形	ラレ ラレ ラレ ラレ	活形	ラレ ラレ ラレ ラレ



広島大学図書
 2000301698



庫
 1
 98